

第5章 大甲の聖人



志賀先生遺影（大正13年〈1924年〉撮影）

1 街民あげて聖人を見送る

葬儀は、正月を控えていたので、死去の翌日12月30日に執行することとなり、教え子達の手によって急遽準備された。式場は、公学校の校庭の西側に大きな黒と白の天幕が張りめぐらされ、中央の一段高い祭壇に霊柩が花で飾られて、机の上には色々な供物や祭具が並べられた。右側が遺族席になっており、遺族がないのに遺族席を作ることはどうかと思う人もあったが、教え子の長老達が、先を争ってその席に着いた。大人が段々増えて来て、子供達は端の方に押しやられ、前の人との首の間から祭壇を眺めなければならないほど、多くの人々が参列した。

導師は、東本願寺派の台中本願寺和尚大野鳳洲師で、金色の帽子をかぶり、黒地に金模様の仏衣に金の袈裟をかけて、小坊主5人を連れて祭壇に静かに登った。読経の音が四方を圧して聞こえると、周囲は水を打ったように静まりかえり、荘厳な雰囲気会場を包んだ。時々、運動場の片隅にあるガジュマルの木から、雀が飛び立つ音が聞こえる位であった。お経の声に連れて、遺族席に座っていた教え子達が、ハンカチを取り出して涙を拭きだした。その内に次から次へとハンカチが開き、嗚咽の音があちこちから漏れた。弔辞を読む人が、声を詰まらせ涙を拭くと、皆、共に泣いた。教え子代表の呉淮水が弔辞を読み上げるときは、参集者が皆胸を打たれ、涕泣の音が式場に満ちた。

哲太郎の教え子黄直發の父で、大甲街の市場前で酒店「勝吉」を経営していた黄木材は、哲太郎の死を聞き、痛嘆の弔詩を作った。ほかにも多くの弔辞・弔詩が寄せられたが、何れも哀情切々たるもので、哲太郎の遺徳を偲び、その死を惜しむものばかりであった。



葬儀式場

葬儀が行われた大甲公学校校庭 矢印が会場 昭和初期撮影（大甲國民小學提供）



台中本願寺（絵葉書引用）

件名： 寄附金募集事項變更認可
 内容描述： 認可大野鳳洲等7名變更募集臺中寺大門建設費之期限
 關鍵詞： 大野鳳洲、臺中寺大門建設費
 出版日期： 大正11年07月02日(19220702)

台湾総督府府報に大正11年7月寄附金募集事項變更認可に関して大野鳳洲の名前ある（台中寺大門建設費の関係）
 國史館臺灣文獻館引用

弔辞
大正十三年十二月三十日、故志賀先生の御霊前に、大甲公学校出身門下生謹みて一言を告ぐ。
先生は明治三十二年二月、本校に教鞭を執られ、当時の台湾、当時の大甲、悪戦苦闘二十有六年、一生一代をつくして今日における先生の大甲を建設せらる、その結果、我が大甲は血気旺盛なる青年の毛髪を白く染め当年の意気を奪い、遂に悩殺して、今や鉄砧山麓に老骨を葬らんとす、嗚呼哀しいかな。聞けば往事、先生は現時中央政界に時めく政客と共に学び、共に出慮し、天下を呑まん勢なりという。その後、感ずるところありて植民地教育に投ぜられ、爾来同一の目的、同一の場所、同一の主義の下、終始一貫、二十六年を一日の如く勤続し終りたり。廟堂に座し、国事に奔走し、天下に号令す、大丈夫の本懐たるは不肖これを知る。彼、高楼に入り、我れ情誼の校舎に起居す。彼、巨万の富を有するに對し、我れ数千の門下を擁す。国事に尽して可なるも、人材培養に尽すは更に可なり、国家に尽すは一にして、孰れが貴きか未だ量る能はず、不肖等、不幸にして神を識らず、只至れる人として先生を信じ疑わざるものなり、然るに名慾利情に勝つ先生は、終に健康に勝てず、今や再び芳顔を拝する時なし、**志賀死すとも徳は死せず**、不肖を薰化して千載に至らむとす。願わくば安らかに眠り給はぬことを。

門下生 吳淮水 敬拝

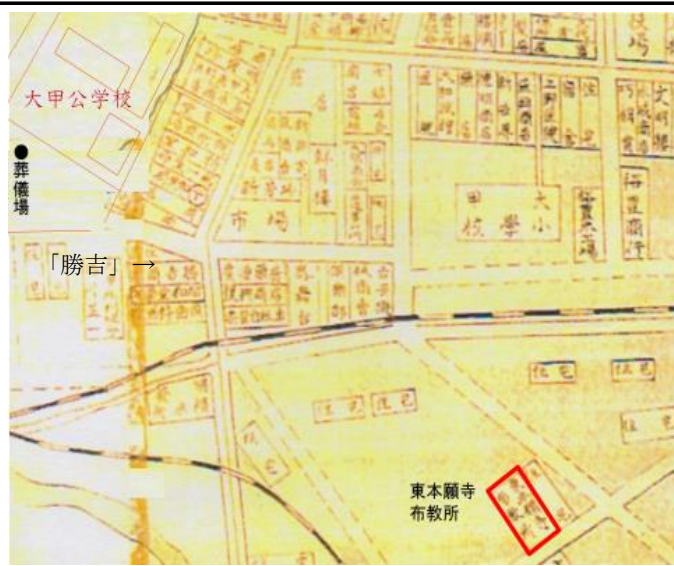


中南拓殖株式会社
副社長
吳淮水
M43卒
当時27歳

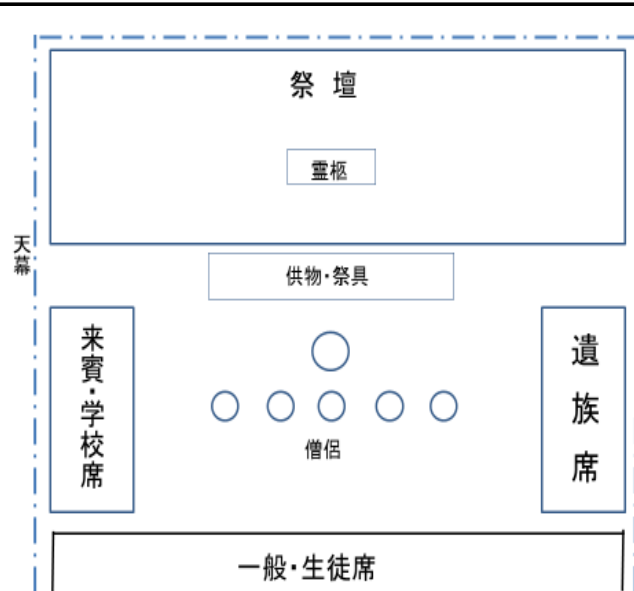
弔詩
青山有福埋高士
流水無情害我師

青い山はこのような高傑な人格の先生を埋めてもらい幸せた、流れる水よ、どうして我が師を害したか、あゝ無情だということだ。

門下生の父 黄木材



黄木材が経営する酒等販売「勝吉」
(大甲区公所提供)



葬儀場見取図



雀が飛び立ったガジュマルの樹
(大甲國民小學提供)

2 鐵砧山に埋葬

教え子と生徒達は、葬儀後、靈柩に随行して鐵砧山麓の墓地に向かった。この墓地は、教え子教師郭金焜が寄贈した百坪余りの墓域で、哲太郎がかねて「死んだらここに埋葬してほしい」と希望していた場所である。葬列は、鎮瀾宮前から北に向かって進んだ。葬列の沿路の商店や民家の人々は、路祭（神を祭る祭礼）の神輿行列の場合と同様に路傍に机を出して供物を並べ、線香を立て金銀紙を焼き爆竹を鳴らして礼拝し、涙を流して大甲の聖者を見送った。一般人の路祭による葬儀は、大甲始まって以来のできごとであった。一代用教員の葬儀が、神様や王侯の葬儀になぞらえて行われたことは、哲太郎がどれほど尊敬され、その徳がいかに深く人々の胸に染み通っていたかを物語るものである。葬列は、遺族がないので、台湾文化協会有力者・吳淮水が位牌を捧げて先頭に立ち、その他の教え子8人が靈柩を担いで鐵砧山麓まで運び、遺言どおり台湾式土葬の方法で埋葬した。風光明媚な鐵砧山麓に葬られ、教え子達の心からの礼拝を受けて見送られた哲太郎は、死してなお幸福であったというべきであろう。



金銀紙（亡くなった人に送る小遣い）



墓地寄贈
郭金焜
T 1 卒 当時27歳

元大甲鎮長
郭金焜宅
(大甲公所提供)



台湾の線香
日本のものより大きい



愛酒塚と墓碑

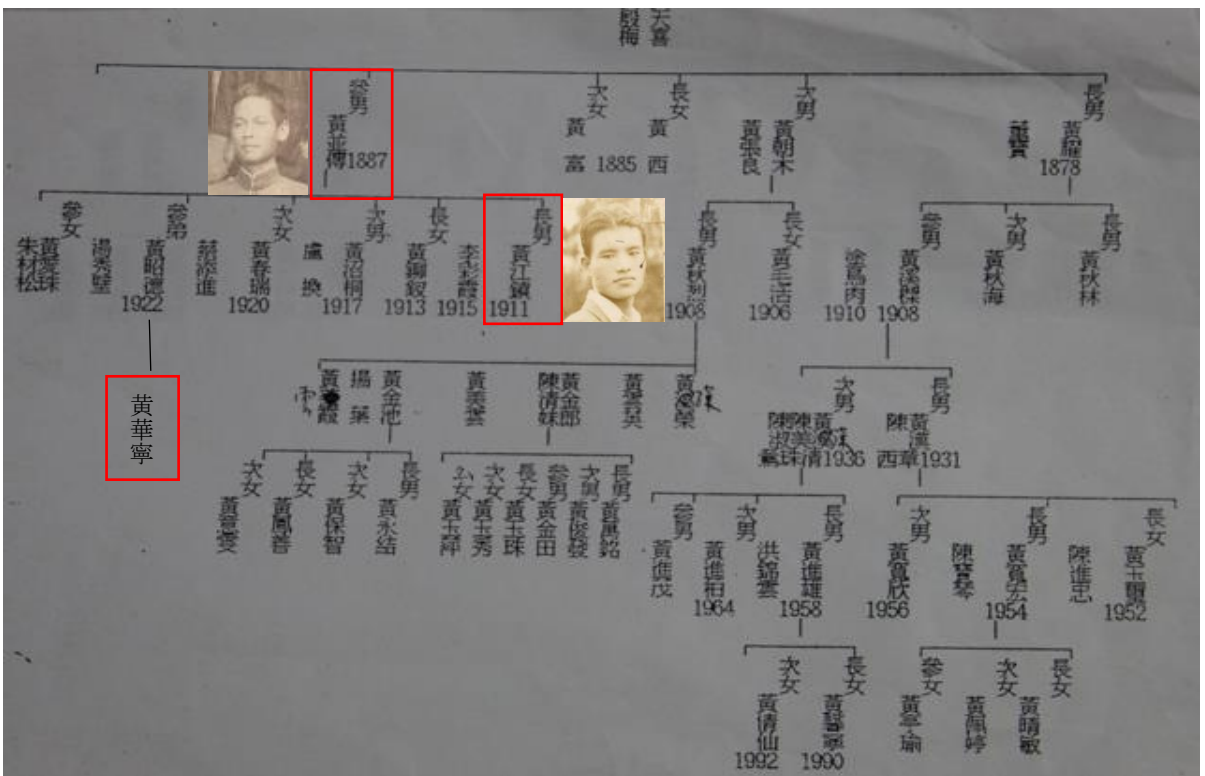
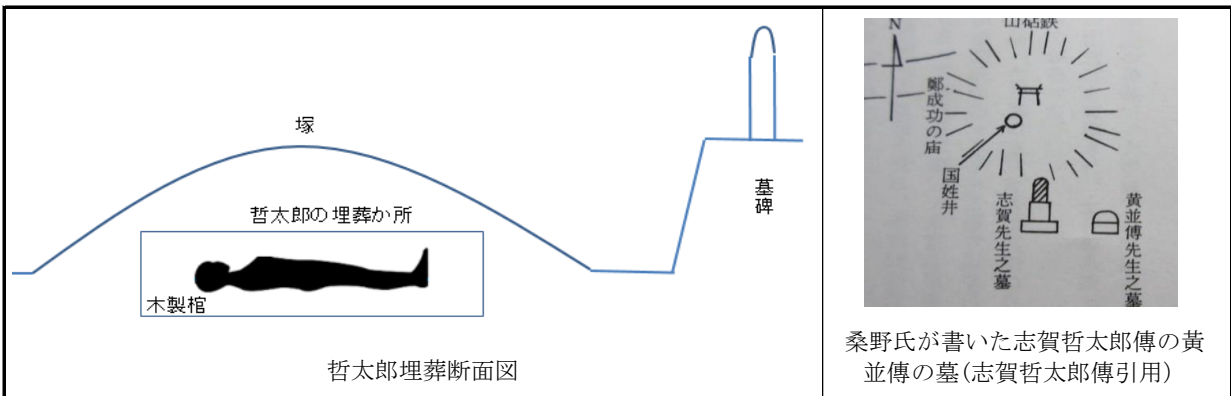


哲太郎が埋葬されている愛酒塚

『志賀哲太郎傳』の著者桑野豊助氏は、「哲太郎の墓に隣接して黄並傳先生の墓がある。黄並傳が志賀先生とあの世でも飲みあおうと約束し、墓も志賀先生の横に建てるようにと、息子の黄江鎮に遺言し、江鎮はこれを守って志賀先生の墓域の隣に『故考黄並傳黄府君一位故墓巳巳十月寂』と刻んだ墓碑を立て、江鎮はこれを『愛酒塚』と名付けた」と図示している。

哲太郎の墓碑の北側にコンクリートで覆われた塚がある。塚はここだけであり、これが黄並傳の墓愛酒塚と思われたが、歴史家張慶宗氏は、「これは志賀先生が埋葬された場所です。黄並傳先生の墓は別にあると聞いています。」と説明した。島村ソデも土葬のようで墓碑の後方に長方形の埋葬跡があることから、塚は、哲太郎の埋葬跡と確認できた。

なお、並傳の墓は、台湾側のその後の調査で並傳の孫黄華寧氏から聞き取りを行った結果、志賀墓園の東側にあることが判明(137ページ参照)し、墓は塚状ではなかった。張慶宗氏は、哲太郎埋葬の塚を「愛酒塚」あるいは「志賀塚」と呼んでいる。



3 教え子呉淮水の怒り

哲太郎の葬儀の翌々日、大正14（1925）年元旦の夜、新年の名刺交換会と祝賀会があり、郡守、警察課長、街長、郵便局長、公医、大甲庄（街）協議会など内地人・台湾人の有力者が集まったが、哲太郎の死去の直後でしめやかなものとなった。警察官の台湾人への圧迫や校長の哲太郎に対する悪行を知っている参加者は、異様な空気を感じていた。校長が新年の挨拶を述べたとき、台湾人達は「この野郎、何とかやっつけてやろう」とささやき合っていたが、正月早々のことで差し控えていた。

宴も半ばになったころ、大甲一の大地主でもある呉淮水が、ステッキをついて現れ、会場に緊張が走った。中央のテーブルに警察課長、校長、日本人数名がいたが、皆総立ちで席を譲ろうとした。呉はそのテーブルに座らず、次のテーブルに腰をおろし中央のテーブルを見やった。日本酒がそのテーブルにあり、他のテーブルにはないのに気付いた呉は、つかつかと校長の前に詰め寄り、「新年宴会に、日本人のみ日本酒を飲むのはけしからん、俺たちにも日本酒を出せ」と大声をあげた。校長は、どぎまぎして弁解しようとした。呉は間髪を入れず「馬鹿野郎」と盃の酒を校長の顔に浴びせかけた。会場の全員が総立ちとなり、殺気が漲った。校長は、ここそと逃げ出し日本人もこれに続いたが、台湾人は残って「哲太郎先生の仇が討てた」「痛快だ」と、盃を揚げて喜んだ。

因みに、岡村校長は、大甲に居づらくなつたのか、翌大正15年9月1日に退職している。

名刺交換会参加者

<p>月益 月益 物産検査員 大甲帽子検査所 大甲郡大甲街 谷口一男警本 丹野権八警本</p>	<p>六 鑛道部 大甲警正恒吉 儀監島</p>	<p>局長五 大甲郵便局(三等) 臺中州大甲郡大甲庄 八井坂 虎松義城</p>	<p>支署長 梧棲支署 臺中州大甲郡梧棲街 從七監八久 留景之助 監島</p>	<p>税關 屬四 支署長 大甲郡梧棲在野王 山 君登甲</p>	<p>外埔 大安 大甲 庄長 李進興 李城 許天 龍登甲</p>	<p>月益 大甲街長 李進興 李城</p>	<p>課長五 警部 警部 從七監八松島 眞固 眞本 警部 從八管野 政衛 龍島</p>	<p>課長 視學 警察課 小笠原敬太郎 島根</p>	<p>屬四 庶務課 大甲郡清水街(六) 郡守(年二〇〇〇) 從七 池田壯太郎 福岡 大甲郡清水街官舎(五)</p>
---	---------------------------------	---	---	---	--	-------------------------------	---	--	---

大正13年台湾総督府職員録引用

 <p>庶務課長 小笠原敬太郎 40歳 霧社事件で死亡</p>	 <p>大甲街長 李進興 48歳</p>	 <p>大安庄長 李城 47歳</p>	 <p>前大甲街協議会員 呉淮水 27歳 M43卒 中南拓殖(株)副社長</p>	 <p>当時の日本酒 「福祿」と「萬壽」</p>
--	---	--	--	---

 <p>大甲街協議会員 岡村正巳 校長</p>	 <p>同協議会員 陳 藻芬 48歳 大甲帽製造</p>	 <p>同協議会員 黄 清波 33歳 M40卒 大甲水利組合</p>	 <p>同協議会員 陳 煌 33歳 M42卒 大甲信用組合</p>	 <p>同協議会員 郭 木榮 29歳 精米工廠</p>																
 <p>同協議会員 李萬青 41歳 大甲屠場経営</p>	 <p>同協議会員 薛寄草 40歳 大甲帽簾組合</p>	 <p>同協議会員 王燕翼 32歳 M43卒 中南拓殖(株)取締役</p>	 <p>同協議会員 林麒麟 37歳 M40卒 大甲信用組合長</p>	 <p>同協議会員 上野齊 熊本県八代市 医師</p>																
 <p>同協議会員 岩元義盛 日南公学校校長</p>	<p>その他協議会員 柯清標 (貿易商)</p> <p>梁成</p> <p>鄭火刀52歳 (土地代書)</p> <p>林天生</p>	<table border="1"> <tbody> <tr> <td>全宗名：</td> <td>000臺灣總督府檔案</td> </tr> <tr> <td>副全宗名：</td> <td>臺灣總督府公文類纂</td> </tr> <tr> <td>宗名：</td> <td>高等官進退原議七至九月分</td> </tr> <tr> <td>件號：</td> <td>86</td> </tr> <tr> <td>件名：</td> <td>〔大甲公學校長〕岡村正巳免官</td> </tr> <tr> <td>冊號：</td> <td>舊冊號：4049 / 新冊號：4049</td> </tr> <tr> <td>冊名：</td> <td>永久保存進退(高)第三卷乙</td> </tr> <tr> <td>時間：</td> <td>起：1926-09-01迄</td> </tr> </tbody> </table> <p>岡村校長T15.9.1辞職（台湾總督府職員録引用）</p>			全宗名：	000臺灣總督府檔案	副全宗名：	臺灣總督府公文類纂	宗名：	高等官進退原議七至九月分	件號：	86	件名：	〔大甲公學校長〕岡村正巳免官	冊號：	舊冊號：4049 / 新冊號：4049	冊名：	永久保存進退(高)第三卷乙	時間：	起：1926-09-01迄
全宗名：	000臺灣總督府檔案																			
副全宗名：	臺灣總督府公文類纂																			
宗名：	高等官進退原議七至九月分																			
件號：	86																			
件名：	〔大甲公學校長〕岡村正巳免官																			
冊號：	舊冊號：4049 / 新冊號：4049																			
冊名：	永久保存進退(高)第三卷乙																			
時間：	起：1926-09-01迄																			
 <p>大甲信用組合事務所（張慶宗氏提供）</p>		 <p>大甲郵便局 昭和3年撮影（「大甲鎮志」引用）</p>																		
 <p>帽子検査所大甲出張所 張所印</p> <p>帽子検査所大甲出張所使用印（張慶宗氏提供）</p>		 <p>郭木榮の精米工廠跡 H29.11撮影</p>																		

4 島村ソデの対応

○死亡届出

ソデは哲太郎の遺族として、先ず、埋葬手続きをするため大甲街役場に死亡届を出している。津森村役場の除籍簿を見ると、「大正13年12月29日午前7時、台湾台中州大甲郡大甲街において死亡。同右者、台湾台中州大甲郡大甲街大甲389番地、島村ソデ届出、大正13年12月30日也。大正14年1月23日受付」とあり、大甲の役場では12月30日、ソデの届け出により受理されたことがわかる。津森村の役場は、大正14年1月23日に除籍としている。死亡時刻は午前7時とあるが、大甲郡警察課の警察官が朝臨場したときは、既に硬直がきていたということであり、硬直は、一般的に死後2~3時間から始まり、12時間で全身に及ぶと言われており、死亡時刻の午前7時は、おそらく死亡推定時刻ではなく、死亡確認時刻であると思われる。

○書籍等の寄贈

ソデは、哲太郎の遺言に基づき、書物約1,000冊、盃等を街に寄付した。(125ページ・志賀文庫参照)

○告别式弔問客への礼状

ソデは、大正14年2月23日付けで、哲太郎の告别式に参加した弔問客に礼状を送っている。教え子である杜香國宛の礼状を見ると、島村ソデが遺族、岡村正巳校長が友人、香山修三教師（熊本県出身）が総代と3人の連名となっており、文面は、御酒料、御香典等は台中本願寺に、哲太郎の永代供養として寄付したとある。

○遺族へ遺品を届ける

ソデは、大正14年のいつの時期か定かでないが、遺品の一部を津森村の哲太郎の妹・澤田ミノに届けている。ミノの孫澤田寛旨氏のもとには、第4章18遺書・遺品(102ページ)で述べた梅鉢の家紋入り羽織、印鑑、公医上野齋から贈られた漢詩及び写真（紋付羽織袴姿）が大切に保管されている。



大甲役場 「大甲老照片專輯二」引用



哲太郎の妹澤田ミノと孫澤田寛旨（昭和4年末撮影）



役場書記 黄垚龍
当時27歳 T 1 卒

139 119 大正13.12.27
139 118

熊本縣上縣津森村大字 田原 三吉 三 拾 番地

明治三十二年八月八日 津森村役場

大甲街大甲三八九番地 島村ソデ 届出

大正十三年十二月二十九日午前七時 死亡

大正十四年一月二十三日 受付

明治十五年十一月五日 除籍

戸主 志賀 甚三郎

妻 志賀 甚三郎 妻

長子 志賀 甚三郎 男

次子 志賀 甚三郎 男

三子 志賀 甚三郎 男

四子 志賀 甚三郎 男

五子 志賀 甚三郎 男

六子 志賀 甚三郎 男

七子 志賀 甚三郎 男

八子 志賀 甚三郎 男

九子 志賀 甚三郎 男

十子 志賀 甚三郎 男

十一子 志賀 甚三郎 男

十二子 志賀 甚三郎 男

十三子 志賀 甚三郎 男

十四子 志賀 甚三郎 男

十五子 志賀 甚三郎 男

十六子 志賀 甚三郎 男

十七子 志賀 甚三郎 男

十八子 志賀 甚三郎 男

十九子 志賀 甚三郎 男

二十子 志賀 甚三郎 男

明治五年九月八日生

明治十四年五月廿二日生

大正九年八月二十八日生

津森村の除籍謄本（澤田寛旨氏提供）



友人 岡村正巳 (福岡県)



総代 香山修三 (熊本県)

○大甲公學校 大甲郡大甲街大甲

訓練

學校長二
月 岡村 正巳 編 四
月 香山 修三 訓 本
月 小野 一郎 編 四
月 郭 金 煥 登 甲
月 陳 嘉 瑜 登 甲
月 杜 瑞 抱 登 甲
月 杜 聰 抱 登 甲
月 杜 清 朝 登 甲
月 黃 清 本 登 中

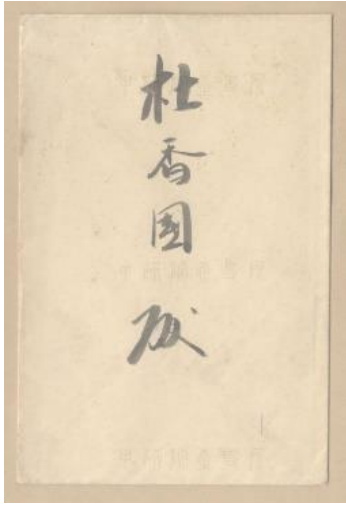
大正13年台湾総督府職員録引用

○大甲郡役所 大甲郡清水街(六)

○警察課

課長五
月 松島 眞 固 頭 本
月 菅野 政 衛 編 島
月 榎本 清 一 附 山
警部補
月 長澤 彌 一 郎 編 本
月 阿武 量 登 山 口
月 八木田 繁 登 本

大正13年台湾総督府職員録引用



杜香國宛封書 (杜香國文書引用)



哲太郎告別式弔問客への礼状 (杜香國文書引用)

拝啓○故大甲公学校教員志賀哲太郎死亡に就ては○同人葬儀に際して
は深厚なる○同情○御心遣ひに預り誠に○○○に○○○に○○○て○
○都合よく○○○へば○○○心○○○は一々○○○候○○○候
○を○さす○○○中毒○○○申上候○○○候
○御酒料御香典はに○○○たし○○○は全部台中本願寺に永代供養
料として○寄付致し候○○○下代表

大正十四年二月二十三日 (○○○)

大甲公學校内
遺族 島村ソ
友人 岡村正巳
総代 香山修三

敬具

5 墓碑建設委員会

哲太郎の墓は仮埋葬で、墓標は杉の角材だった。1月8日午後3時から大甲公学校の講堂で、哲太郎の墓碑建設の発起人会議が開催された。参加者は岡村校長、李進興街長、武藤友次郎助役、杜香国、李欽水、李晨鐘、許天奎、黄清波、王燕翼、吳淮水、陳聯輝、郭成己などの10数名である。先ず、岡村校長が挨拶を述べて顧問、委員長、副委員長、徴収委員、建設委員など16名を選挙で選び、李進興街長が委員長となって議長を努め、

- 建設予算は1千元以下
 - 卒業生や有志者への募金依頼
 - 事務局を公学校内に設置
 - 郡役所の建設認可取得
- などが決められた。（台湾日日新報）

七七祭の2月15日に、墓碑建設の会議が開催された。李進興委員長が建設案を発表、この間、台幣5,000円（現在価値・約250万円）が集まった。委員会では、鐵砧山南麓に墓碑建設をしようと郡役所に申請していたが、同地は鄭成功を祀る國姓廟址の浄地であり、また、鄭成功は開山神社の祭神でもあったことから、認可がまだおいていなかった。しかし、郡役所大甲分室の菅野政衛警部の特別の計らいで、認可を得ることができ、菅野警部も自ら苦力（クーリー＝労働者）と一緒に鍬をとって整地に当たった。（同警部は、昭和5年の霧社事件で、蕃刀の犠牲となった。）

哲太郎の墓の形は、協議会会員で貿易商の柯清標が日本各地を巡り、神戸の高利貸乾新兵衛の墓が異彩を放っていたことから、墓の見本として建設委員会に報告した。工事は、工業学校建築学科卒の吳金土に一任した。

墓碑建設発起人				 鄭成功像（大甲区公所提供）
 李進興 48歳 大甲街長	 武藤友次郎 57歳 大甲街助役 (友人)	 岡村正巳 大甲公学校校長	 杜香國 30歳 台湾証券株式会社 (教え子)	
 李欽水 29歳 大甲街役所 (教え子)	 李晨鐘 大安庄長 (教え子)	 許天奎 41歳 外埔庄長 (教え子)	 黄清波 33歳 大東信託株式会社 (教え子)	
 王燕翼 32歳 中南拓殖株式会社 (教え子)	 吳淮水 27歳 中南拓殖株式会社 (教え子)	 郭成己 獣医師 (教え子)	 墓碑の見本 高利貸乾新兵衛 (神戸市)	
				 國姓廟（大甲区公所提供）



國姓廟の燈籠は戦後清水神社のものを移設（大甲区公所提供）



清水神社 昭和12年建立（大甲老照片引用）



大甲郡役所大甲分室跡 H29. 11撮影
（現台中市警察局大甲分局）
菅野警部が当時の大甲分室長

大正 2（1913）年	嘉義庁竹頭崎支庁	警部補
大正 7（1918）年	嘉義庁中埔支庁	警部補
大正 9（1920）年	彰化郡役所警察課	警部
大正10（1921）年	大甲郡役所警察課	警部
大正14（1925）年	竹山郡役所警察課	警部
昭和 2（1927）年	新高郡役所警察課	警部
昭和 4（1929）年	台中州警務部理蕃課	囑託
昭和 6（1930）年	台中州警務部理蕃課	囑託

菅野政衛警部（福島県）の人事記録

昭和四十九年一月
志賀哲太郎先生顕彰會
發起人（臺灣側）

大阪華僑總會名譽會長 陳廷岳
元旗山拓殖株式會社社長 吳淮水
元 大 甲 鎮 鎮 長 郭金焜
日勝製林廠董事長 杜聰明
元大甲農業學校校長 劉金扁
元大甲國民小學學校長 杜萬福
元大甲國民小學學校教導主任 黃送來
元大甲國民小學學校教導主任 李慶珍
元大甲鎮公所人事管理員 梁財
果樹園經營主 吳金土

工事担当の吳金土は昭和49年の顕彰會發起人



菅野警部が犠牲となった霧社事件の九州朝日新聞記事



工事担当の吳金土の事務所 H29. 11撮影
（建物は現存）



昭和12年の広告
（大甲区公所提供）

日治時期大甲帽商及派員駐日一覽表

駐神戸出張員姓名	神戸分店地址
柯清標	神戸市八幡通5-141-1 神戸市北長峽通3-8-8

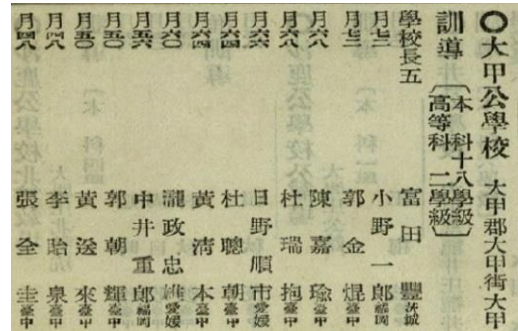
墓碑見本調査担当の柯清標の神戸派遣記録
（大甲鎮誌引用）

6 建碑式

建設にあたっては、教え子たちから規模拡大の要求があり工事を3回やり直して完成を見た。底部は高さ約60センチ・約5.4メートル四方で周囲を鉄柵で囲む。底部の上は石造高さ約60センチ・約2.7メートル四方で同じく鉄柵で囲む。更にその上は石造高さ約1.6メートル・基部約1.8メートル四方で頂部約1.2メートル四方、そして最上部には高さ約1.2メートル厚さ約25センチの自然石が据えられた。

建碑式は、昭和2年（1927）2月20日、関係者を迎えて行われた。墓碑の表に「志賀先生之墓」、裏に墓碑銘が刻まれた。墓碑銘の文は、文学士伊藤賢道、書は書道家郭虚一。式に参加した元校長金子政吉は「氏は氏の哲学を以て、一身を大甲に捧げたのである、氏は、生を与えてくれた神様に対しては、十分に報謝を了した事と、予定の計盡を實行し得た事とに対し、誇りと自信とを以て、笑って遠きまことの故郷に旅立たれた事であろう、墓誌に大甲聖人の語ある亦宜なるかなである。嗚呼尊きかな志賀先生」と述べている。同じく式に参加した三代目校長富田豊は、学校行事として哲太郎の命日に高学年の生徒を駆り足で連れて行き墓参したという。墓参のコースについては、呉淮水の孫呉建東氏によれば、生徒は墓園近くの呉淮水宅に立ち寄った後、参拝したそうである。

なお、二重の鉄柵は昭和16年8月の金属回収令で撤去されたものと思われ、現在はない。



大正15年大甲公學校職員名簿
(台灣總督府職員録引用)



高学年生が墓参の際、立ち寄った呉淮水宅
現在、建物は存在しない（呉建東氏提供）



台北工業書記
金子政吉
当時57歳



第三代校長
富田豊

日治時期，每年到了志賀先生的忌日
大甲公學校的校長，會帶領著學校的高年級學生走到鐵砧山的志賀先生墓地行禮致敬

富田校長が高学年生の命日墓参を
学校行事とした（大甲鎮誌引用）



墓碑正面



墓碑側面



墓碑裏面



鉄柵予想図 H28.2撮影



鉄柵支柱の痕跡



鉄柵を通す穴



鉄柵支柱の痕跡



昭和二年二月二十日、故志賀哲太郎先生の建碑式は、先生の心血を注いで天職につくされたところ、しかも先生終焉の地である大甲公學校から程近い地に建てられた。予はその式に臨み、ありし當時を追懐して萬感まことに胸にせまるを覺ゆるのであった。今少しく先生に關する思い出を記して見たいと思ふ。

先生の碑は國姓廟址を少し下ったところ、眼下に大甲附近の村落と遙かに廣い青海原とを見下ろす絶景の地を選び、底部は高さ二尺の三間四面、その上の墓石は高さ七尺で基部方六尺、頂部方四尺の人造石造りに二重鐵柵そして其の上に四尺の自然石が建てられたものであって、實に堂々たるものである。而してこの碑は全く兒童父兄の自發的になったものである。思ふに本島幾百の亡教育家にして官邊其の他より何等の助言も何等の斡旋もなくして、父兄や教へ子達のみによって死亡當時の葬儀より一切の後事がかくも鄭重に取り營まれたるもの改隸三十有餘年蓋し志賀氏を以て嚆矢となすであらう。嗚呼山高水長の風韻固く人心に結び所謂卿先生歿して社に祀られたるもの、永く傳へて美談となすべきであるまいか。

志賀氏がかくまでも固く地方の人心に結びつき、かくまでに子弟を感孚浸潤した所以のその根基は、之を那邊に索むべきであらふか、先生は常に缺席生は自ら街裡に走りてこれを尋ね貧生には紙筆を給して督励せし底の、至れり盡せる懇到ぶりの結果なりとなすべきか、或は、又二十六年と云ふ稀有の勤續の結果なりとなすべきか、これ等は何れも否定し得ざる事實には相違なきも氏をして茲に至らしめた最も奥深き或るものがあることを私は言ひ得るのである。それは即ち志賀氏が「大甲の爲に一身を棄つべく早くより覺悟を定めてみた。」と云ふ事なのである。氏のこの美しい大覺悟が今日この堂々たる碑と形をかへて表れたのである。社に祀らるゝ基を開いたのである。長き問知を辱うしたる自分は氏のこの美しき覺悟を世間に吹聴し紹介する事が故人に對する禮であると思ふものである。

世に來るべき死を知らないものはない。しかし、安心し徹底してその來るべき死を待ち得るものに至っては蓋し甚だ少ないであらう。先生は早くより人生を大悟し、死生を達觀し、自己の死に場所を定め、來るべき死を待ち得たので、實に卓抜なる人生觀の持ち主と云ふべきである。

志賀氏には任官したいとか、一校を管理して見たいとか云ふ様な希望は初めより毛頭なかったのである。又氏は渡臺以来一回も歸郷したことの無い人であつて、従つて氏には名義上將に物質上の待遇の如きは一切問題ではないのであつた。唯々眞つ黒くなつて學校の爲めに地方の爲に働けばそれで事は足りるのであつた。これには他に眞似の出来難い事で氏の偉かつた所以である。

又氏は猛烈に責任觀念の強かつた人であつた。その遺書なるものゝ第一項は「近來神經衰弱症にかゝり心身日々に衰へ、更に往日の意氣なく、かくして尚職に留るは上御一人に對して相濟まず。又父兄に對しても申し譯けなし。」と云ふのである、地方の一教員が上御一人に對して責任を感ずる。これが死を撰んだ先生の肺腑より出た眞劍の言葉なのである、又在勤二十六年間無缺勤であると云はれて居るが、先生も時には病氣にかゝることはあつたのであるが、如何なる苦しい時も必ず一度は登校し、出勤簿に捺印し然る後引き取つたものである。

但し、今になつて思ひ出されることは先生が酒間常に「自分が死んだら墓は必ず鐵砧山に造つて貰いたい、そして火葬は嫌だから是非土葬にしてほしい」と言つて居られた事である。また壯年の三十代から自己の死壯場所を定め得るに至つたについてはそこに何等かの悲惨事が潜んで居るではないかと思はれぬではない。がこのことは氏に接近した人々が再三聞かされたことであつて骨を大甲に埋むべく固き決心をして居られた事は明らか事とせねばならぬ。そして今回の建碑が先生の美しき人格が父兄や子弟などの淨玻璃に正しく影を映じた結果であることは云ふまでもない。

内地に於ける志賀先生は政界に操觚界に將た宗教界に何れも或る位地を占め、その前途に渴望されて居つたのであつて、従つて渡臺當時にあつては欺くの如くして人生の幕を閉つべく豫期して居なかつたことは勿論である、最初士族の商法に失敗し次いで間もなく二回に亘る垂死の大患は當時の氏としては最も窄き門戸である。公學校教員に満足せねばならぬ境遇に墮せしめたのである。そして就任當初は如何に三十年前の教壇とは云へ鞭執るべく餘りに無經驗であつた氏には實に苦しき月日であつたのである。その熱心と懇切とは著々父兄の信頼を開拓し得たとは云へ教へ兒がどしどし師範を出て新知識として上席に位置するなどを少しも介意せず、宗教によつて強く且つ大なるものを見出すべく、如上の勇猛心が生まれたのではあるまいかと思はれる、一別十有餘年の私が當年を偲びつゝペンを走らす間にも獨りで眼瞼の潤むを覺ゆるのであるから永き間朝夕を共にした父兄や子弟達が氏の口水を聞き驚顛し天に哭し地に働きたるべきは想像に難くない。

志賀先生の太死を以て孤獨の悲哀が生んだものであるとするものがあるさうである。がこれも強ちに打消し得ない様な感じもする。もし教育盛りの子供を擁する場合などには石にとりついても死なれないと云ふ年輩なのである。恩給こそないが二人の老を養ふべく苦しき立場にあるとも思はれない。それに又氏の隱退を豫期して待つて居る子の如き教へ子が大勢控へて居るのである。何を苦しんで自ら死を撰んだものかと云はれるのも無理ではない、伊藤公がハルピンの露と消えたのは六十九歳であつたが尚一年の行程一萬哩を期したとせられて居る、永らへてさへ居れば殘年を盡すべく幾多の仕事が君の大甲にあつたではあるまいか、矢張り氏の境遇が氏を此處に導いたのではあるまいかとも思へ得る、誠に悲痛の極みである。さりながら逝くものは追ふべきでない、氏は氏の哲學を以て一身を大甲に捧げたのである、氏は生を與へてくれた神様に對しては十分に報謝を了した事と、豫定の計畫を實行し得た事とに對し誇りと自信とをもって笑つて遠きまことの故郷に旅立たれた事であらう、墓誌に大甲聖人の語ある亦宜なるかなである、嗚呼尊きかな志賀先生。

7 墓誌銘

【現代語訳】

先生の姓は志賀、名は哲太郎といい、慶應二年八月二十八日に生まれた。熊本県上益城郡津森村の人である。幼いときから学問が好きで、大きくなってからは、気骨が大事であると思うようになった。十八歳になり、同県の神水義塾で、中西・八淵・藤岡の諸賢人と仏教学の宣伝に務めた。三年後、紫溟会に入り、国権党员になった。国家が大日本帝国憲法を發布し、国会を召集するようになり、再び佐々、紫藤、古荘などの諸名士と交わり、京都と郷里の間を行き来し、新聞記者として、当時重んじられる存在になった。

二十九歳の時に政界を去り、初めて同県の原水小学校の教壇に立ち、更に近くの大原義塾の発展にも努めた。翌年の十二月、日本列島西南の台湾に渡り、四年間、商業に従事したが、やがて家永苗栗辨務署長に知られて、明治三十二年二月、大甲公学校の代用教員に雇われて、二十六年間も在職することになった。

先生は、徳育を重んじて、知育と体育は次にした。就任した頃は、日本が台湾を統治して間がなく、台湾の親たちは学校の貴いことを理解せず、先生は苦勞も厭わないで、自分で生徒を勧誘し、登校を怠るものがいれば、その度に、その家まで訪ねては、手を尽くして諭し、出席するまで止めなかった。家が貧乏なものには、文房具から学費まで世話をしたり、沢山の生徒が育ち、成績も向上して、多くの人材を出すようになったが、これはいつも他校を抜きでた。上層部は、こうした業績をほめて、いつも先生の昇任を計ったが、先生は、大甲の風俗が美しく情が厚いこと、生徒たちは教えるに値すること、自分は独身で家庭の煩いが無く、この土地を棄てて他校へ転勤することは忍び難いことなどの思いが益々募り、昇任を固く拒み続けて、この話は遂に無くなった。

当時の台湾の教育界では、民族差別が甚だしかったが、独り先生だけは、人の分け隔てをすることなく、自らはつつましく、人を慈しみ、それを少しも自分の手柄にすることはなかった。先生は、いつも自分には三つの宝物があると言っておられた。それは、一つには慈悲、二つには儉約、三つには出しゃばらないことで、先生は、この三つが身についておられた。


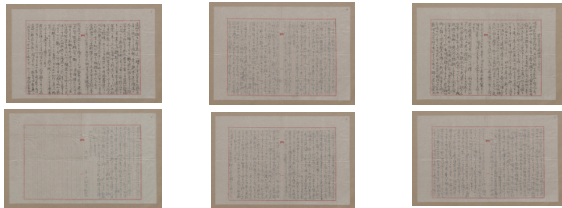
大正十三年、遂に過勞で倒れ、十二月二十九日に大甲で逝去された。行年五十九歳であった。大甲地域の人々は、先生の死を痛惜して已むことがなかった。翌日、門下生達が寄付金を募り、先生の意思に従って、遺骸を鐵砧山麓に葬った。葬儀には大甲の遠近から千余人の人々が集まって、葬列に加わったが、中には余りにも泣き悲しんで声が出ない者もいた。沿道で靈柩を見送る人々までが皆涙を流して別れを告げた。

先生は、高位高官の方でもなく、或いは金銭で人々に影響を与えた訳でもなかったというのに、生前は多くの人々に慕われ、死後にはこれほどまでに悲しまれるとは、実に偉大な存在であったというほかはない。門弟や旧知の人々は、更に葬儀の翌年に相談して墓石を立てて、先生への敬慕の念を永く後世に伝えたいとして私に、大甲聖人の為に墓誌銘を作るよう依頼があり、謹んでこれを作った。先生は、生前に大徳が高かったが、長生きが出来なくて、誠に残念なことであった。天よ天よ。私はこれが悲しまれてならないのだ。先生は徳・知・体の三つの教えを一体と化し、及びもつかぬ功績をおたてになった。自身は低い地位に甘んじて、大きな善事を積み表に出ることなく、淡々として至高の生涯であった。

大正十五年十月三十日

伊藤賢道 撰
鄭虚一 書

伊藤賢道は、台北師範学校の教師、鄭虚一は新竹市の漢学者である。哲太郎の教え子で国語学校（台北師範学校）卒で、大甲漢学会を組織していた杜香國は、原稿用紙に「另外収録當地人士因感念志賀氏生前的德澤，而準備為其建立紀念碑所擬撰之碑文稿」と、哲太郎に対する生前の恩恵に感謝し、哲太郎の偉業を後世に残すため、関係者からの話を収録して建碑文をまとめている。杜香國が台北師範学校卒の関係で伊藤氏に、漢学会の関係で鄭に墓誌銘を依頼したものと思われる。墓誌銘の訳については、斯文第120号「志賀先生（伊藤賢道）撰文解題並びに訳注」のおりである。

<table border="1"> <tr><td>姓名</td><td>伊藤賢道</td></tr> <tr><td>本籍</td><td>三重</td></tr> <tr><td>日本紀年</td><td>大正十三年</td></tr> <tr><td>西元紀年</td><td>1924</td></tr> <tr><td>單位名稱</td><td>諸學校 臺北師範學校</td></tr> <tr><td>官職名</td><td>囑託</td></tr> </table>	姓名	伊藤賢道	本籍	三重	日本紀年	大正十三年	西元紀年	1924	單位名稱	諸學校 臺北師範學校	官職名	囑託		
姓名	伊藤賢道													
本籍	三重													
日本紀年	大正十三年													
西元紀年	1924													
單位名稱	諸學校 臺北師範學校													
官職名	囑託													
台湾総督府職員録引用	杜香國（教え子）	杜香國が収録した「建碑文」 杜香國文書引用												

斯文第120号 平成23年3月発行

志賀先生（伊藤賢道）撰文）解題並びに訳注

解題 村山吉廣 訳注 松本征儀

志賀哲太郎は慶応二年（一八六六）生まれ、大正十三年（一九二四）十二月没。五十九歳。熊本県上益城郡津森村（現・益城町）の人。県の神水義塾に学び、国権黨員となり佐々友房、古庄嘉門らと政治運動に従事していたが、政界に志を絶ち台湾に渡り、明治三十二年（一八九九）、大甲公学校に奉職、以後二十六年にわたり、教育に尽くし、大正十三年十二月、自ら命を絶って亡くなった。碑文には「積勞成病」とのみ記してある。生涯独身であった。終始、童蒙を導く純粋な志に燃えていて榮進を願わず、転勤も拒み、二十六年代用教員として、ひたすら大甲の人々のために励んだ。当時の台湾の日本人官吏は文官も服に剣を吊っていたが、志賀は「剣を吊っている教育は行えない。教育は威圧ではない。児童の知能を啓発し育てるもので、役人根性を以ってこれを律するのは教育の道に反する」と信じていた。そこで一生、私服で袴で通した。地域に対する官吏の圧迫もひどく、税も過酷であったので、官憲に抵抗できない住民の苦しみは多かった。志賀は彼らに同情し、彼らの代弁者として、しばしば警察や弁務署に出向いて奔走し、時にはげしく渡り合った。日常は結婚式やお祭りにもよく招待されて住民と共に過ごすことを何よりの喜びとした。しかし台湾の植民地支配を目指す官憲と志賀の志とはしばしばきしみを生じていた。転勤を拒む志賀に対するいらだちもあって、圧迫は増していた。志賀の突然の死の陰にそうした事情のあったことは住民たちにもわかっていた。志賀の葬儀は住民達の日頃の官憲への鬱情をはらすかのごとく荘厳なうちにも盛大に行われた。老いたる教え子たちは会場の片隅の榕樹の下でみなとめどもなく涙を流していた。金力や権力を持たない一代用教員の葬式があたかも大富豪や王侯の葬式のようなだったと人々は語り伝えている。「大甲の聖人」と呼ばれた志賀の墓は鐵砧山麓に設けられ、碑はその傍らに建立された。戦後、日本政府からの依頼で台湾にある日本人の墓を掘り起こし、遺骨を日本に持ち帰ることになった時、大甲の人々は日本代表部に申し入れて「先生の墓は動かさないでほしい」と嘆願した。かくして志賀の墓はいまもなお大甲山麓にある。先年、訳注者の松本氏が取材のために訪れた時、案内してくれた土地の人々の志賀に対する崇慕の念は、おどろくほど深いものがあったという。訳注者の松本氏の挙げておられるように志賀については桑野豊助氏の「志賀哲太郎伝」をはじめ、いくつかの貴重な研究論文がある。なお、大甲はかつて苗栗庁、のちには台中庁に属していた。鐵砧山は標高七百尺で町の北手に位置している。海岸線には南北に走る鉄道の大甲駅がある。

（早稲田大学名誉教授・斯文会参与）

〔原文〕

先生姓志賀、名哲太郎、生於慶應二年八月二十八日、熊本縣上益城郡津森村人也。幼好學、長尚氣節。年十八、在縣之神水義塾、與中西八淵藤岡諸彦、宣力佛學。越三年、入紫溟會、爲國權黨員。逮奧國家創頒憲典、召集議會、復與佐佐紫藤古莊諸名士、周旋往來、操觚京都下關、爲時所重。年二十九、絕志政界、始從事縣之原水小學教育、兼致力大原義塾。翌年十二月、買舟南渡臺灣、懋遷四載、受知家永苗栗廳長、明治三十二年二月、應大甲公學校之聘。在職凡二十六年、一以德育爲先、智體次之。就任之初、改隸日淺、臺之父老、未知學校可貴、先生不辭勞頓、躬親勸誘、遇有輟學者、

輒至其家、百方開導、不至回學不已。家貧者給以紙筆學費、芄芄械樸、薪之標之。故其作人之濟濟、常冠於他校。上峯嘉其篤行、每欲陞拔。先生轉念、是地風俗醜美、子弟率勤謹可教、く、余家、隻身無累、不忍棄而他適、固辭乃止。當時在臺疆任教育者、於種界分別甚嚴。獨先生不然。儉己慈人、不居其功。我有三寶、寶而持之、一曰慈、二曰儉、三曰不敢爲天下先、先生有焉。大正十三年積勞成病、十二月二十九日、沒於大甲。享齡五十有九。闔鄉人士、痛惜不已、翌日門弟子集祭、治葬於鐵砧山麓、從先生志。及葬遠近來會、執紼者、可千人多。有哭泣不能成聲、沿途觀者亦皆泣下。非有高官顯位、或以貲力號召、而廼生慕死哀、致人若是。嗚呼尚已。門弟子故舊、更於既葬明年、謀爲立石永垂觀感、乞言於余。曰爲我大甲聖人銘。茲謹爲之銘。曰德豐於生、命嗇於死、天平天平、余、甚悲此。三教融心、有立卓爾。安卑志尊、上善如水。

大正十五年十月三十日

伊藤賢道撰 鄭虛一書

〔訓誦〕

先生の姓は志賀、名は哲太郎、慶應二年八月二十八日に生まる。熊本縣上益城郡津森村の人なり
(一)。幼にして學を好み、長じて氣節を尚ぶ。年十八、縣の神水義塾にありて、中西・八淵・藤岡の諸彦と、力を佛學に宣ぶ(二)。越えて三年、紫溟會に入り、國權黨員となる。國家憲典を創頒し、議會を召集するに逮んで、復は佐佐、紫藤、古莊の諸名士と、周旋往來し、京都下關間に操觚して、時の重んずる所と爲る(三)。年二十九にして、志を政界に絶ち、始めて縣の原水小學の教育に従事し、兼ねて力を大原義塾に致す(四)。翌年十二月、舟を買ひて南のかた臺灣に渡り、懋遷すること四載、知を家永苗栗廳長に受けて、明治三十二年二月、大甲公學校の聘に應ず。在職すること凡そ二十六年、一に德育を以て先と爲し、智體之に次ぐ(五)。就任の初め、改隸して日淺く、臺の父老、未だ學校の貴ぶべきことを知らず、先生は勞頓を辭せず、躬ら親しく勸誘し、遇たま學を輟むる者あらば、輒ち其の家に至りて、百方開導し、學に回るに至らざれば已まず。家貧しき者には給するに紙筆學費を以てし、芄芄たる械の樸ち、之を薪にし之を標めり。故に其の人を作すことの濟濟たるは、常に他校に冠たり(六)。上峯は其の篤行を嘉して、毎に陞拔せんと欲す。先生は、是の地風俗醜美、子弟率く勤謹にして教ふべく、余が家、隻身にして累無く、棄てて他に適くに忍びざることを、轉だ念ひ、固く辭して乃ち止む(七)。當時臺疆に在りて教育に任ずる者は、種界に於いて分別甚だ嚴たり。獨り先生は然らず。己を儉にし人に慈にし、其の功に居らず。我に三寶有り、寶として之を持す、一に曰く慈、二に曰く儉、三に曰く敢へて天下の先と爲らずと、先生焉有り(八)。大正十三年勞を積み病を成し、十二月二十九日、大甲に没す。享齡五十有九。闔郷の人士、痛惜して已まず、翌日門弟子は祭を集め、葬を鐵砧山麓に治して、先生の志に従ふ。葬に及んで遠近來り會し、紼を執る者、千人の多きなるべし。哭泣して聲を成す能はざる有り、途に沿ひて觀る者も亦皆泣下る(九)。高官・顯位、或は貲力を以て號召するに有る非ずして、廼ち生きては慕はれ死しては哀しまれ、人を致すこと是くのごとし。嗚呼尚きのみ(十)。門弟子故舊、更に既に葬むるの明年に於いて、謀りて爲に石を立て永に觀感を垂れんとして、言を余に乞ふ。曰く我が大甲聖人の銘を爲せよと。茲に謹んで之が銘を爲る(十一)。曰く德は生に豊かにして、命は死に嗇なり、天平か、余、甚だ此を悲しむ。三教融心、立つ有りて卓爾たり。卑きに安んじ尊きに志す、上善は水の如しと(十二) 大正十五年十月三十日 伊藤賢道撰(十三) 鄭虛一書(十四)

〔註解〕

(一) ○戸籍名は岩太郎、父甚三郎(鍛冶屋)、母寿加、長男。○戸籍上は慶応元年八月二十八日生。○津森村：当時の大字田原330番地、現在は町村合併により益城町となる。

(二) ○明治5年7歳で津森村木山の志賀塾(志賀喬木、号巽軒、漢学者)で読書き、そろばん、四書五經のほどきを受けた。○津森西方二里の神水義塾では四書五經から王陽明の知行合一説を学び、仏典を八淵蟠龍、英書を中西牛郎に学び、学問の進展を見た。○中西牛郎(うしお、一八五九—一九三〇) 神水義塾設立者、宗教思想家。○八淵蟠龍(ばんりゅう、一八四八—一九二六) 浄土真宗本願寺派の僧侶。○藤岡覚音(がくおん、一八二三—一九〇七) 宗教家。

(三) ○明治二十年二十二歳で上京、東京法律学院で法律を専攻するも、父の死去で帰郷、家業を止めて、紫溟會(佐々・古莊等が結成した国家主義を標榜する政党)に入る。○国權党：明治二十二年熊本県下佐々友房等を中心に国權拡張を運動目標として結成された政治団体で、紫溟會の組織の中の結社。○佐々友房(克堂)(一八五四—一九〇六) 明治期の政治家。○紫藤章(あきら)

(桂陰)(一八五九—一九三三) 農務省に入り、養蚕界の権威となる、農学博士。○古莊嘉門(一八四〇—一九一五) 明治期の政治家、国權党総理、台湾総督府内務部長を歴任。○操觚：文筆に従事する事、志賀は九州日日新聞の記者として健筆を揮い活躍した。

(四) ○志賀は国權黨員として活躍したが政争の醜惡な実状に嫌気がさし沈思した結果、教育界が最適と考え政界を離れた。教育勅語の存在も一因とされる。○原水小学：菊池郡原水在、訓導(旧制小学校教員)となる。○大原義塾(総代紫藤寛治)：菊池郡原水在、塾頭となる。

(五) ○渡台：熊本での教育活動は必ずしも志賀の意に染むところとならず、将来に就き熟慮した結果、素志実現の為、時流に乗り台湾に雄飛せんとした 懋：領台早々に教育制度未だ定まらず、当面の凌ぎとして商業に従事した。志賀は初め台北で酒肆を営むも算盤に疎く閉店、次いで台中の鉄道工事の御用達商なるも土匪の襲撃で財物を失い命の危険に曝され、女中ソデの機転で一命は救われた。その後悪性マラリアの大患に遭い、大甲の媽祖廟内の陸軍病院で療養、九死に一生を得た。これらの体験が志賀の教育に強く再志向する縁となる。折しも公学校制度が成立した。なお、媽祖とは海上安全の女神で台湾で信仰が篤く、殊に大甲鎮瀾宮は台湾有数の廟で信仰は夙名高い。○家永泰吉郎（新竹法院長心得、新竹弁務署長、苗栗辨務署長、苗栗庁長の跡、新竹庁長を歴任、大正三年依願免官）は志賀の同郷の後輩にあたり安達謙三の紹介状を持って面談、家永の好意で即苗栗庁雇いの代用教員に採用された。当時大甲は苗栗県の行政区域にあった。明治四十年台中県に変更。○公学校：日本統治時代の台湾に於ける義務教育機関、一八九八（明治三一）年成立、その前身は国語伝習所、植民地で統治開始早々から現地の児童等を対象に教育を実施する制度は世界でも稀な例であった。大甲で教育に使用した施設は、初めは文昌廟（学問の神を祀る）で、先に反抗勢力平定の近衛師団南下の際、北白川宮が兵を進めた縁の駐輦処でもあった。志賀は当時の校長金子政吉と意気投合し、生徒の指導に勉めた。

(六) ○改隸：台湾の統治権が清国から日本に交代したこと。日清戦争に勝利した結果、日本は明治二八年清国と下関条約を締結し、台湾・澎湖島の割譲を受け統治を開始した。○勞頓：勞瘁、不辭勞瘁（苦勞を厭わないこと）芄芄：草木の美しく繁っているさま。○椽樑：賢材が多いこと。共に出典「詩経」大雅。○濟濟：優れた人の多いこと。出典「詩経」大雅。

(七) ○上峯：旧時、上官・上役。○陞抜：昇官すること。文官となり制服帯剣し、転勤を伴う。志賀は苗栗庁雇いの代用教員として常時和服で通し、大甲に骨を埋める覚悟であった。

(八) ○疆：境。日本本土から見て、台湾は当時西南端にある領土、台湾の地、地域。○種界分別：当時、台湾の教育界では現地人と内地人を厳しく区別していた。○我有三寶：以下の文は出典「老子」六十七章。

(九) ○闔郷：全村の皆、全村民。○鐵砧山：大甲街西北約三キロにある標高二百三十メートル程の風光明媚な山、鄭成功（父鄭芝龍、母日本人田川まつ、平戸生幼名森）像やゆかりの劍井が有名、山頂は整備されて公園になっている。○従先生志：志賀は生前、死後は台湾式土葬でと遺言し、鐵砧山に葬られることを望んでいた。墓地は教え子が寄贈し墓は初め仮埋葬で墓標は杉の角材であった。○緋：柩を載せた車を引く綱。柩を引く綱を手を執る意から、葬送に加わること。

(十) ○生慕：学校では勿論のこと、正月になると教え子たちが次々と家を訪れ、また祭りや結婚、その他、折あるごとに志賀は父兄からも招かれて、土産持参で出掛けて行って、現地の人々と歓談した。○死哀：葬送の際、沿道の商店や民家は皆路傍に机を出し、供物を並べ線香を立て、金紙を焼き、爆竹を鳴らし礼拝して見送った。こうした現地の風習は、路祭または置香祭と言い、媽祖等の神々の神輿行列に限られた敬意の表示であった。女中ソデの嘆きは見るも忍びないほどで、また公学校の小使李天送は亡くなるまで志賀の墓参りをしたと伝えられている。

(十一) ○立石：建碑のこと。志賀の七七祭の折に既に話が決まっていた。鐵砧山は浄地で墓を建てるのが許されないのが時の大甲郡警察大甲分室主任警部の特別の計らいで許可が出た。同警部は建碑の際、鋤を取って整地した。後、霧社事件で犠牲。○永垂觀感：師に対する「尊敬の念を後世へ永く残し伝える」の意。

(十二) ○三教：通常、儒・仏・道を指すが、ここでは業績を上げた教育方針、即ち、徳育を重んじ知育・体育を次とした三つかと解される。なお、志賀は朝晩の座禅を日課とし儒・仏・道に通じていた。なお、死後、遺言によりその千冊に近い蔵書は大甲に寄付されて、大甲図書館が設立されたが、先の大戦中戦禍を受け、大部分が焼失した。○卓爾：高くすぐれているさま。出典「論語」子罕、「如有所立卓爾」に拠る。

○上善：最高の善。出典「老子」八章、「上善は水の若し、水は善く万物を利して争わず、衆人の悪む所に居る」に拠る。

(十三) ○文学士、台北国語学校、台北一中教諭、桑野豊助（「台湾大甲聖人志賀哲太郎伝」の著書）の恩師、号は壺溪、台湾日日新報編集長を兼ねる。

(十四) ○新竹市在の漢学者、書道家。新竹県は苗栗県の北に接し、季節風が強く風城の名があり、ビーフン、干し柿、貢丸湯（肉団子入りスープ）等の特産地。客家人が多く住む。近年は半導体などのハイテク産業で世界に知られ、台湾のシリコンバレーと言われている。

8 熊本と新高山の墓碑

哲太郎の熊本の墓は、最初は田原の共同墓地にあった。昭和60（1985）年当時、田原の坂本達（いたる）氏は、志賀哲太郎を顕彰すべく墓探しを行い、荒れ放題の中に「志賀哲太郎墓」と刻せるものを発見した。墓石の裏面に「氏ハ幼ニシテ学ヲ好ミ家事傍ラ独学後飽託郡健軍村中西氏ノ塾ニ入漢学ヲナス佛教雑誌国教発行サレルヤ中西氏ト共ニ編輯ニ従事ス其後渡台ヲ志シ台中県大甲公学校ニ教鞭トルコト廿五ヶ年間実ニ其ノ績大ナリ大正十三年十二月廿九日享年五十九才ヲ以テ病死ス学校側及ビ子弟相謀リ氏ノ功ニ酬ユルタメ墓地新高山ノ麓ニ記念碑ヲ建設ス此ノ墓地ニ其ノ遺骨ヲ分納シタルモノナリ」と記されていた。墓は昭和10年8月、妹の澤田ミノの夫である金蔵が建立したものである。（「舩船」引用）

墓は昭和60年頃、共同墓地が整理された折に撤去され、志賀家の遺骨は、澤田光男の三男の妻イトによって澤田家の遺骨と共に浄信寺の納骨堂に納められた。哲太郎の墓碑は、津森町民グラウンドが造成された際に埋められた。その後、平成2（1990）年、イトの長男澤田寛旨氏が熊本市戸島町の熊本市営桃尾墓園に移し、志賀家と澤田家の墓碑を並べて建立した。浄信寺には志賀家の過去帳が残されている。同墓園には、平成29年10月11日志賀哲太郎顕彰会によって「台湾大甲の聖人志賀哲太郎先生墓所」の標木が建てられている。

田原にあった墓石には、前述のとおり、大甲公学校側と子弟が協議して、新高山（現玉山）の麓に記念碑を建設し、遺骨を分納したとあるが、現在、確認は取れていない。新高山は標高3,952mと台湾で最も高い山で、教え子たちは、哲太郎の故郷熊本を望める場所として、この地に分納したものである。



浄信寺（益城町） H28.3撮影



桃尾墓園の志賀家の墓 H29. 10撮影



墓碑左側面 H29. 10撮影



説明碑 H29. 10撮影



墓碑が埋められた津森町民グラウンド



台湾で最高峰の新高山（玉山）標高3952m



新高山（現玉山）の麓に哲太郎の記念碑がある
写真は戦前撮影の新高山連峰



9 芝山巖合祀

大正14(1925)年2月、台湾教育会機関誌「臺灣教育」第272号に、大正14年に芝山巖に合祀された教員が掲載され、その中に哲太郎の写真入りの説明がある。写真は30代のものと思われ、出身地、出生、学歴、勤務学校、褒賞、死亡理由及び死亡日が書かれている。他の合祀者と違うのが、哲太郎の場合は、死亡の理由が書かれていない点である。自決が関係してのことと思われる。

合祀された方々は、ほとんどがマラリアなどの風土病で亡くなっておられ、当時の台湾の厳しい衛生環境がわかる。また、26年間という長期にわたる勤務者は、哲太郎のみであり、しかも教員心得という最下位の職名が目立つ。当時、校長職でも採用後、8年位でなっていたようで、哲太郎がいかにか大甲を愛し、徹底して任官を拒否し続けたかを裏付けている。

大正十四年芝山巖合祀者肖像

故臺中州大甲公學校教員心得

志賀哲太郎君

熊本縣上益城郡津森村大字田原三三〇の人、慶應二年八月二十七日出生、明治十六年より三箇年熊本縣神水義塾に於て普通學を學び、後京都に於て英語を、東京に於て法律を學ぶ、明治三十二年渡臺同年五月臺中縣大甲公學校を命ぜらる。大正三年六月十七日滿十五年以上教育に従事し勤務不尠に付臺中廳より褒賞せらる。爾後引續き大甲公學校に勤續す。大正十三年十二月二十九日死亡。

故臺中州大甲公學校教員心得

今村俊二郎君

鹿嶋縣東臼杵郡栗原村大字三須六五〇の人、明治三十二年三月七日出生、大正九年三月臺北育英學校公學校教員を奉命、當時公學校教員に任ぜられ、臺中州大甲公學校勤務を命ぜらる。同十年三月臺中縣公學校に轉任、大正十三年十月四日病歿に死す。

故臺南州牛埔公學校教員心得

岡田末利君

熊本縣八代郡宮原町字牛尾八五三の人、明治二十九年六月三日出生、大正十二年三月熊本縣八代縣立學校卒業、四月臺灣七十四公學校教員心得を命ぜられ、十三年三月牛埔公學校に轉任、大正十三年五月七日急病に倒れて死亡。

故高雄州杉林公學校長

小宮山四十郎君

山梨縣北巨野郡中田村七九〇の人、明治二十三年五月二十八日出生、大正二年三五縣附屬府國語學校師範部甲科卒業、同縣立公學校教員に任ぜらる。後、檳榔嶼、楠梓嶼各公學校を経て杉林公學校長に任ぜらる。大正十三年三月二日暴水熱にて死亡。

大正十四年2月「臺灣教育」第272号 芝山巖神社合祀者肖像 (弘谷多喜夫氏提供)

芝山巖合祀は、明治29年7月1日六士先生の慰霊祭を兼ねて、芝山巖に「学務官僚遭難之碑」が建立された。その後、台湾教職員で構成する台湾教育会が発足、碑の管理・運営に当たり、明治31年以降、毎年2月1日に例祭を行った。明治38年の十年祭に、台湾教育に従事した功労者を、合祀して氏名を刻んだ「故教育者姓名碑」を建立した。合祀基準は、「一、本嶋に於て死亡したるものに限ること 二、戦死又は勅令指定の風土病若くは流行病に罹りたるものに限ること 三、本嶋人と雖も、戦死者は之を参加せしむる方針なりしも、該当者なきに依り除外したること」というものである。昭和3年に至り、台湾教育会は、昭和天皇即位記念事業として、芝山巖神社の造営を決め、昭和5年に竣工している。神社ができる前は「芝山巖合祀」、神社ができてから敗戦までが「芝山巖神社合祀」ということになる。双方の合祀者数は、昭和8年330名、昭和17年には529名に達している。

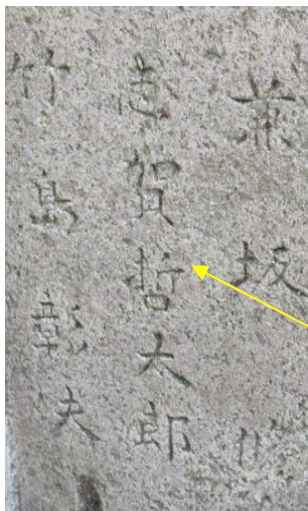
故教育者姓名碑は、大正期撮影の写真のように三基あり、戦後、国民党政権によって神社は取り除かれ、同碑も破壊された。だが平成7年芝山巖学堂開設を創立年としている士林国民小学が、百周年を挙行し、平成12年に中央と左の碑2枚を復元した。中央の碑は表側10人4列、裏側10人5列の計90人、左の哲太郎の名がある碑は表側10人4列、裏側10人3列5人1列の計75人で、残り空白となっている。この空白部分から芝山巖神社合祀となる。粉々にされ復元されていないもう1枚の碑が、六士先生の名がある碑と思われ、破片で名前が読み取れるのは3人で、そのうちの1人に富田仙太郎の名がある。この人は明治39年斗六庁斗六公学校を最後に亡くなり、時期からして六士先生と同じ碑と思われる。哲太郎は、大正14年2月1日に祀られており、楫取道明から219人目の芝山巖合祀者となっている。



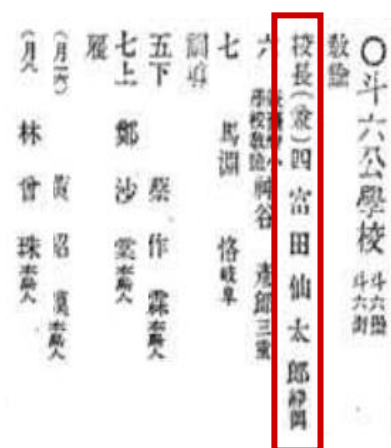
芝山巖神社(絵葉書引用)



大正期撮影の故教育者姓名碑



復元された故教育者姓名碑 (台北市芝山巖公園) H28. 2撮影



富田仙太郎は斗六公学校校長(台湾総督府職員録引用)

10 志賀文庫

哲太郎の書籍約1,000冊は、ソデにより盃等の遺品とともに街に寄付された。書物は漢学、仏教、禅宗、哲学、法律、修身、道徳等で、一代用教員としてよくも集められたと、街役場の関係者が驚いた程である。哲太郎は、禅を奉じ、読書万卷、儒道仏の原理に精通した宗教の大家でもあったことから、仏教関係の書物が多かった。

哲太郎が本を買い求めていたことについて、教え子の陳焯の手紙が残っている。陳焯は民族運動で活躍した人で、彼は日本や米国に留学しており、哲太郎は、その際、本の購入を依頼するが、陳焯は依頼された本を探せずに帰国し、お詫びの手紙を出している。

これら寄贈の書物は「志賀文庫」として、街が街民のために管理した。初代街長李進興は、図書館設立を計画するが、昭和5年に亡くなり、第二代街長となった熊本県出身の柴田一平（助役は教え子の鄭進丁）が、昭和7（1932）年1月21日、鎮瀾宮に大甲街立図書館を創設した。これは、その後も第三代街長秋山久七、第四代街長田村勉に引き継がれた。

戦後、図書館は第一市場上階に移されるが、昭和51（1976）年の第一市場改築の際、書籍は四散してしまい、現在は残っていない。また、一説には先の大戦の戦禍を受け大部分が焼失したともいわれているが、大甲の街は煉瓦造りの家が多く、鎮瀾宮一帯は戦前に建てられた建物が数多く現存しており、戦禍の説は考えにくい。

 <p>初代街長 李進興 大甲街營盤口</p>	 <p>第二代街長 柴田一平 (熊本県)</p>	<p>街長 清水 一級下俸 正七員梅松 梧棲 月名 楊水 熾昌 大甲 二級上俸 柴田一平 河津</p>	
 <p>第三代街長 秋山久七 (香川県)</p>	 <p>柴田街長時の助役 鄭進丁 (教え子)</p>	<p>柴田一平 大甲街長 昭和10年 台湾総督 府職員録 引用</p>	<p>大甲街長李進興の葬儀 昭和5年3月29日 (大甲老照片引用)</p>
 <p>戦後第一市場上階に移った図書館 (大甲区公所提供)</p>	 <p>大甲街長李進興の墓 昭和5年4月11日 (大甲老照片引用)</p>		

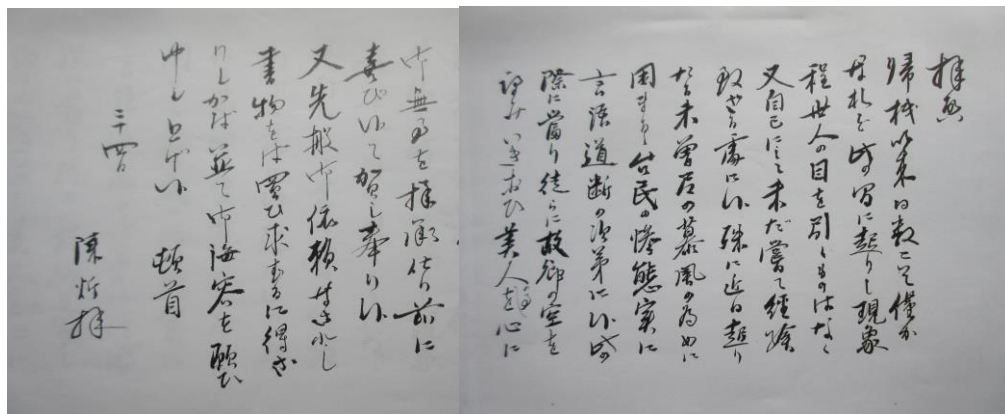


大甲街航空写真 (大甲区公所提供)

陳焯が哲太郎から依頼された書籍が購入できなかったことについてお詫びの手紙 (張慶宗氏提供)



陳焯 (教え子)



直訳
 拝啓
 帰校以来日数こそ僅かなれど此の間に起りし現象程世人の目を引くものはなく又自己にして未だ嘗て経験致さる處に候、殊に近日起りたる未曾有の暴風の為めに困るる台民の惨態実に言語道断の次第に候、此の際に当り徒らに故郷の空を望みいきおひ美人の事を心に懸け申し候、今や足下の御無事を拝承仕候前に喜候て賀し奉り候
 又先般御依頼なされし書物をば買ひ求むるに得ざりしかば並て御海容を願ひ申し上げます
 二十四日
 陳焯(花押)

現代語訳
 拝啓
 帰って来て以来、日数こそ僅かですがこの間起こった現象ほど世の中の人の目を引くものはなく又私自身も未だかつて経験したことがありません。特に近日起こった未曾有の暴風の為めに困っている台湾人民の惨状は実に言葉で言い表せないほどの状況です。このような時、むなしく故郷の空を望み元氣なあなたの事を氣にかけております。今や目の前の御無事をお祈りします。又先般依頼された書物を買ひ求めましたが得ることができませんので海のような広い心でお願いします
 頓首
 二十四日
 陳焯

訳：齊藤正孝氏

11 没後10周年墓前祭

大甲の教育功労者志賀哲太郎が亡くなり、ちょうど10年目、卒業生、教育関係者が中心となって、没後10周年の墓前祭が、昭和9(1934)年12月29日午前10時より鐵砧山の麓の志賀墓園で開催された。参列者は、台中州知事竹下豊次をはじめ台中州教育関係幹部、大甲公学校・大甲女子公学校の在校生、卒業生、各団体など約3,000名が集まり、祭文、詩を奉読し、花輪、軸を供え、焼香・礼拝して大甲の聖人の慰霊を行った(昭和10年1月1日付台湾日日新報)。死して10年、これだけの参列者が集ったことを見ても、哲太郎の偉大さがわかる。

 台中州知事 竹下豊次 47歳 (宮崎県)	 大甲街長 柴田一平 56歳 (熊本県)	 台中師範付属 郭金焜 37歳 M41卒教え子	 大甲興業株式会社 陳煌 43歳 M42卒教え子	 大甲街協議会員 杜聰朝 37歳 M43卒教え子	 旗山拓殖株式会社 吳淮水 37歳 M43卒教え子	 医師 朱青松 36歳 M44卒教え子
 台中州協議会 王燕翼 35歳 M45卒教え子	 大甲街協会 黃垚龍 37歳 T 1 卒教え子	 大甲街協議会 王對 31歳 T 7 卒教え子	 大甲の名医 郭秋漢 29歳 T 9 卒教え子	 大甲街協議会 高積前 26歳 T 11 卒教え子	 詩人 張建墻 23歳 T 13 卒教え子	 大甲女子公学校 蘇張成德 教え子
 大甲公学校長 岩元義盛	 大甲公学校 黃清本 40歳 M42卒教え子	 大甲公学校 杜萬福 30歳 T 8 卒教え子	 大甲公学校 郭秀卿 29歳 T 9 卒教え子	 大甲女子公学校 黃江鎮 24歳 T 13 卒教え子	 大甲女子公学校 林芳慶 24歳 T 13 卒教え子	 大甲女子公学校 陳守仁 教え子

<p>訓導 六學校長 丸大好 光壽 楊北 辰章 陳守 仁章 李木 生章 黃江 鐘章 蘇張 成章 林芳 慶章</p> <p>教員心得 山本 菊代 酒居 美代 林芳 慶章</p>	<p>○大甲女子公學校 大甲郡大甲街大甲 (本科 九學級)</p> <p>訓導 李慶 珍章 郭萬 壽章 上野 久章 高都 秀章 小都 秀章 周東 成章 郭秀 卿章</p>	<p>○大甲公學校 大甲郡大甲街大甲 (本科 一六學級)</p> <p>訓導 元義盛 慶章 杜萬福 慶章 郭朝 耀章 黃清 本章 張送 來章 李水 來章 石川 忠章 齊藤 克章</p>
---	---	--

昭和9年台湾総督府職員録引用



大甲公学校 昭和3年撮影 (大甲國民小學提供)



大甲女子公学校 昭和3年撮影 (大甲区公所提供)

12 志賀先生記念園計画

昭和5（1930）年、ソデが亡くなると、教え子達は、ソデの扶養料残金と募金で、鐵砧山の畑地約2万平方メートルを買って、皇紀元2,600年（昭和15年）までに、墓所前面の大甲農業國民學校（現大甲農工校）に、志賀先生記念園を造ることを計画した。教え子黄江鎮は、横浜の八聖殿に安達謙蔵元内務大臣を訪ね、中山会の発起人になってもらうとともに、「志賀先生記念園」の碑銘の下書きをしてもらい、公園の実現化を進めていた。しかし、大東亜戦争のため、この計画は頓挫した。安達謙蔵が書いた書は、黄江鎮が所有していたと思われるが、その所在は不明となっている。



志賀先生記念園計画図



志賀先生記念園計画場所



大甲農業國民學校 大甲老照片專輯二 引用



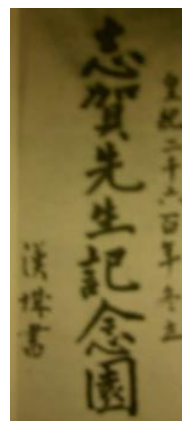
黄江鎮が訪ねた横浜市にある八聖殿（安達謙蔵建立）

志賀先生の霊安かれ
台湾の教え子たちが墓守り
26年間の師弟愛今も

この人は土城郡大甲鎮南門津路出...
大正十五年、黄江鎮は独自の...
昭和四十四年十月一日 熊本日日新聞

台湾にある志賀先生の墓
(片岡さん撮影) S.44.10.31

昭和44年10月1日 熊本日日新聞



安達謙蔵による志賀先生記念園碑銘下書き
志賀哲太郎傳引用



元内務大臣
安達謙蔵 当時76歳



台湾省教育庁長
黄江鎮 T13卒
当時30歳

13 教え子の活躍

哲太郎の教え子は千余名を数える。大甲は元々大陸との往来が繁く、日本統治時代には、特産の大甲帽、大甲蓆の貿易が日本との間でも盛んであった。人的交流も多く、日本への留学生が列を成すほどで、教え子の中から成功者が数多く出た。哲太郎は、教え子達に、ことあるごとに日本への留学を進めたが、大甲の豊かで学問好きな土地柄は、地方都市としては、稀にみるほど多くの人材を輩出する土壌でもあった。

政界						
	台湾省建設庁長 朱江淮 T6卒	通商代表部高等官 朱叔河 T3卒	大甲鎮長 郭金焜 M41卒	大甲鎮長 郭金童 S3卒	大安庄長 李晨鐘 T1卒	臺中県参議員 王錐 M44卒
						
	台中県議 王對 T7卒	台中県議 陳後成 T7卒	台中県議 許等 T12卒	台中県議 劉雲騰 T13卒	大甲里長 王龍 S4卒	台中市議員 黃清本 M42卒
						官吏
	政治家 王國楨 T9卒	黨風里長 王甲壬 T10卒	日南里長 林雨田 T15高卒	大甲街協会 黃垚龍 T1卒	区総代 林炳焜 T6卒	
						
	台北市政府警察局 黃乾傳	大甲街役場 郭元鐘 T3卒	大甲鎮公所 柯天利	大甲鎮公所 陳潤濱	大甲鎮公所 梁財	台湾省教育庁長 黃江鎮 T13卒
教育界						
	大甲公学校 黃並傳 M37卒	大甲公学校 陳嘉瑜 M37卒	大甲公学校 郭彩鳳 M40卒	大甲公学校 黃雀 M42卒	大甲女子公学校 陳守仁	大甲公学校 劉朝棟 T3卒

					
大甲公学校 杜允順 T 5 卒	大安國民学校長 如黃卿 T 6 卒	大甲女子公学校 蘇張成德	大甲公学校 吳墩烈 T 6 卒	海墘公学校長 許宋發 T 7 卒	大甲公学校 李慶珍 T 7 卒
					
北京大教授 吳墩禮 T 8 卒	大甲第一國民学校長 杜萬福 T 8 卒	大甲公学校 郭朝輝 T 8 卒	大甲公学校 黃送來 T 9 卒	大甲女子公学校 郭秀卿 T 9 卒	大甲實踐農校長 劉金扁 T 10 卒
					
大甲公学校 李貽泉 T 10 卒	大甲第二國民学校長 賴夏茂 T 12 卒	大甲公学校 陳式珪 T 12 卒	大甲女子公学校 黃江波 T 12 卒	海墘公学校長 許宋發	大甲老照片編纂 王烟德
					
華龍國民小校長 周燕	日南公学校 周東成 T 13 卒	光復後第二校長 張七章	大甲女子公学校 蘇虎	日南公学校 張啟川	
					
財界 中南囑託(株)社長 許天奎 M 38 卒	蓬萊紙(株)社長 杜香國 M 39 卒	大甲帽蓆輸出商 林麒麟 M 40 卒	大阪華僑總會會長 陳廷岳 M 40 卒	大東信託(株)役員 黃清波 M 40 卒	太陽商會社長 杜瑞抱 M 40 卒
					
元泰商行 李皆得 M 41 卒	中央製氷(株)役員 李欽水 M 42 卒	大甲興業(株)社長 陳煌 M 42 卒	台灣信託(株)社長 陳斡 M 42 卒	旗山拓殖社長 吳淮水 M 43 卒	中南拓殖會社長 王燕翼 M 43 卒

					
藥店梅 林鑽梅 M43卒	文友社社長 王元吉 M43卒	南興建材社長 黃直發 M44卒	台中帽蓆商役員 陳啟明 M44卒	南國貿易合資会社 吳淮澄	永信製藥社長 張其來 T 2 卒
					
新竹帽子社長 郭火旺 T 4 卒	信用組合理事 張全圭 T 9 卒	中部米穀協代表 高積前 T 11 卒	南華化学工業社長 吳墩燦 T 12 卒	大丸株式会社社長 郭細寅 T 13 卒	大信商會神戸代表 黃萬居 T 13 卒
					
台中帽蓆商役員 李燕山 S 2 卒	大甲鎮農會役員 杜聰朝 M45卒				
医学界 					
醫師 朱青松 M44卒	三榮實費医院 王守信 T 7 卒	醫師 郭秋漢 T 9 卒	醫師 陳長庚 T 12 卒	獸醫師 郭戊己	
報道界 			法曹界 		
臺灣日日新報 李炳焜 M45卒	記者 柯天來		司法書士 陳嘉邦 M38卒	司法書士 郭展亨	臺中地方法院 林秋波 T 8 卒
宗教界 			その他 		
台湾仏教公会長 釋賢頓 M45卒	牧師 王守勇 T 6 卒		詩人 張建墻 T 13 卒		

14 墓碑撤去阻止

日本の敗戦により、日本人が台湾から全て引き揚げてしまった後、毛沢東率いる共産党軍との内戦に敗れた蒋介石の国民党軍が、中国大陸から台湾に逃げ込んで来た。彼らはたちまち台湾統治の実権を握り、日本統治時代の墓石、記念碑を悉く破壊し撤去した。文昌祠にあった北白川宮御遺蹟碑も同様である。そうした中でも、哲太郎の墓は教え子達によって守られた。

日本が独立を回復した昭和27（1952）年、台北に日本大使館が設けられ、同33（1958）年、大使館から国民党政府の外交部に依頼して、日本人の墓があったら遺骨を一か所に集めて供養するという指令が各役場に来た。大甲でもそのための事業費として五千元の予算を組んだ。そして、哲太郎の墓も取り壊し、遺骨を持っていく計画であった。普通なら、あれだけ心を尽くしたのだから心残りはないはずだ、お骨を持って行くならそれでもよい、どうせ日本人だから日本大使館に任せたらいいだろう位でけりがつき、墓は発かれて他人の骨と一緒に供養されるのが関の山といったところだろう。しかし、哲太郎の教え子達は違った。協議の上、日本大使館に代表を出して「先生の墓は動かさないで欲しい」と嘆願し、「この墓は日本人のものに違いないが、葬られているのは我々の恩師であり、墓は我々が建立したものだ。我々が尊敬する志賀先生の墓は動かさないでほしい」と願い出たのである。これを聞いて日本大使館でも、「それは有り難い、我々の真意は誰も供養する人がないのを考慮してのことであって、そんなに日本人の墓を大切にしてくれることは大使館としても有難い」というので、墓はそのまま残り、教え子達も胸をなでおろしたのであった。



国民党軍を迎える女学生（台湾老照片引用）



戦後、文昌祠にあった北白川宮御遺蹟碑は撤去（大甲区公所提供）



昭和27年8月5日台北に日本大使館開設（芳沢謙吉自伝引用）



華龍国民小 校長 周燕
大甲鎮農會 常務監事 杜聰朝 M45卒 当時61歳
旗山拓殖会社 社長 吳淮水 M43卒 当時61歳
代書人 郭展亨

墓碑撤去を阻止した教え子たち（大甲老照片引用）

15 生誕100年祭

哲太郎が亡くなって50余年。教え子たちも大部分は死去して数少なくなった。生存者の80歳に近い老翁達が、哲太郎の在りし日を偲びその徳を讃えるために記念碑を建て、生誕100年祭を昭和41(1966)年9月28日に行った。哲太郎は8月28日生まれであるが、9月28日は台湾では教師節であることから、この日に合わせた。当時は戒厳令下で、日本や日本人を称える行為は反体制的行為であり、そのような難しい状況の中で、教え子達は碑文を行政院長の孫科に依頼して実行することができた。これは、哲太郎を反軍国主義者、抗日闘争の英雄として扱ったためである。生誕100年祭には、大甲在住の教え子達はもちろん、島内、東京、神戸、熊本、その他の各地から、教え子100余名が参集した。また、伝記の発行、映画の制作、銅像の建立も計画されたが、残念ながら、戒厳令下では計画を進めることができず、記念碑建立と日本における桑野豊助氏の「大甲の聖人志賀哲太郎傳」発行を除き、ほとんどが実現できなかった。

		<p style="text-align: right;">孫科院長題 志賀先生之牌</p> <p>中日親善垂範先覺志賀先師語錄 人將實行始能領悟。人將領悟始顯傾軋。如何啓發，雖為人師最難處，但是聖潔光輝之大事業。 天賢一人以教化大衆。天當一國以均霑寰球。休論權利多盡義務，人間始有溫暖信任與光明。 侵略與搗亂皆因無知，無知是天下公敵，不能持久。當今人智開明，加速進步。時勢所趨不出百年，為自他安全，世界必定通力合作，自律啓蒙，聖暴就範，可期永遠之和平。 陽奉陰違，口是心非。壞人未敢標榜邪惡，唯有偽裝正義以作護符。此可謂其投誠之前奏，證明正義必勝，既在古今定局，專待哲仁勇者，團結開導而已。 放任小邪，日後可成亂世大盜。看嬰兒臨水火不救者，依法有罪。姑息小邪而不糾正者，是為精神上之罪犯。 我輩挺身滾入大千世界，與天地人溶化為一體，始得剛健心身，超越苦樂，以創造偉業。</p> <p style="text-align: center;">志賀哲太郎先師誕辰百年祭紀念 大甲公學校門生暨孫民同志敬撰立碑</p> <p>中華民國五十五年九月教師節 門生蕭 鈞 志敬書</p>		
<p>志賀先生之碑 (大甲區公所提供)</p>	<p>碑文書 行政院長 孫科 孫文の第二子 75歳</p>			
				
				
<p>杜聰朝69歳</p>	<p>賴夏茂</p>	<p>郭金焜69歳</p>	<p>吳淮水69歳</p>	<p>周燕</p>
<p>生誕100年祭 昭和41 (1966) 年9月28日 「大甲老照片專輯二 (提供黃經業)」</p>				

映画化される大甲聖人

益城出身の志賀さん

教え子が遺徳慕い

日台文化のかけ橋に



故志賀哲太郎氏

「日台文化のかけ橋」として、益城出身の志賀哲太郎氏が、大甲聖人の映画化に尽力している。志賀氏は、大甲聖人の伝記を著し、その精神を現代に伝えることに努めている。大甲聖人は、台湾で教育活動を行い、多くの子弟を育てた。志賀氏は、その功績を後世に伝えるために、映画化を推進している。大甲聖人の精神は、現代社会でも重要な教訓となっている。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を継承しようとしている。大甲聖人の映画化は、多くの人々にその精神を伝える貴重な機会となる。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を現代に伝えることに尽力している。



資料集めのため朝日社をたずねた右から後野、陳、紀伊の各氏

大甲聖人の映画化は、多くの人々にその精神を伝える貴重な機会となる。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を現代に伝えることに尽力している。大甲聖人の映画化は、多くの人々にその精神を伝える貴重な機会となる。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を現代に伝えることに尽力している。

大甲聖人の映画化は、多くの人々にその精神を伝える貴重な機会となる。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を現代に伝えることに尽力している。大甲聖人の映画化は、多くの人々にその精神を伝える貴重な機会となる。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を現代に伝えることに尽力している。

教え子が生涯百年祭計画 銅像や伝記を出版



志賀先生の伝記を出版する台湾留学者 曾江謙吉氏

大甲聖人の生涯百年祭計画が、益城出身の志賀哲太郎氏によって進められている。志賀氏は、大甲聖人の伝記を著し、その精神を現代に伝えることに努めている。大甲聖人は、台湾で教育活動を行い、多くの子弟を育てた。志賀氏は、その功績を後世に伝えるために、映画化を推進している。大甲聖人の精神は、現代社会でも重要な教訓となっている。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を継承しようとしている。大甲聖人の映画化は、多くの人々にその精神を伝える貴重な機会となる。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を現代に伝えることに尽力している。



カネ・曾江君

志賀哲太郎 熊本が生んだ 台湾・大甲の聖人

志賀哲太郎氏は、熊本が生んだ台湾・大甲の聖人である。彼は、大甲で教育活動を行い、多くの子弟を育てた。志賀氏は、大甲聖人の精神を現代に伝えることに努めている。大甲聖人の精神は、現代社会でも重要な教訓となっている。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を継承しようとしている。大甲聖人の映画化は、多くの人々にその精神を伝える貴重な機会となる。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を現代に伝えることに尽力している。

志賀哲太郎氏は、熊本が生んだ台湾・大甲の聖人である。彼は、大甲で教育活動を行い、多くの子弟を育てた。志賀氏は、大甲聖人の精神を現代に伝えることに努めている。大甲聖人の精神は、現代社会でも重要な教訓となっている。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を継承しようとしている。大甲聖人の映画化は、多くの人々にその精神を伝える貴重な機会となる。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を現代に伝えることに尽力している。



故志賀英船氏

志賀哲太郎氏は、熊本が生んだ台湾・大甲の聖人である。彼は、大甲で教育活動を行い、多くの子弟を育てた。志賀氏は、大甲聖人の精神を現代に伝えることに努めている。大甲聖人の精神は、現代社会でも重要な教訓となっている。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を継承しようとしている。大甲聖人の映画化は、多くの人々にその精神を伝える貴重な機会となる。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を現代に伝えることに尽力している。

志賀哲太郎氏は、熊本が生んだ台湾・大甲の聖人である。彼は、大甲で教育活動を行い、多くの子弟を育てた。志賀氏は、大甲聖人の精神を現代に伝えることに努めている。大甲聖人の精神は、現代社会でも重要な教訓となっている。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を継承しようとしている。大甲聖人の映画化は、多くの人々にその精神を伝える貴重な機会となる。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を現代に伝えることに尽力している。

民族を超え、愛そそぐ 志賀先生という人 福本 敬介

志賀先生という人。福本 敬介。志賀先生は、民族を超えて愛を注いだ。彼は、大甲で教育活動を行い、多くの子弟を育てた。志賀氏は、大甲聖人の精神を現代に伝えることに努めている。大甲聖人の精神は、現代社会でも重要な教訓となっている。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を継承しようとしている。大甲聖人の映画化は、多くの人々にその精神を伝える貴重な機会となる。志賀氏は、大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を現代に伝えることに尽力している。



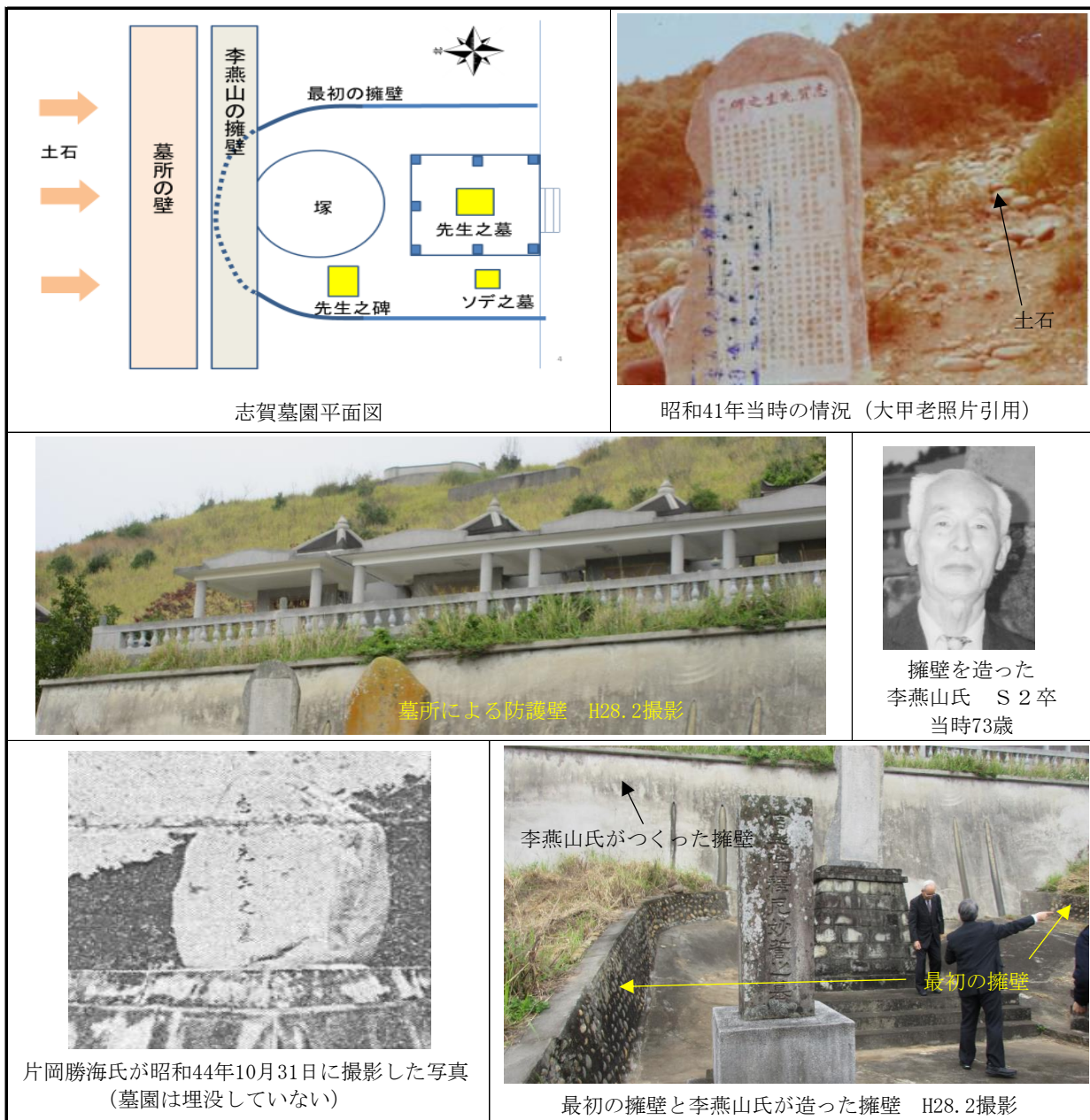
大甲聖人の遺徳を慕い、その精神を現代に伝えることに尽力している。

16 志賀墓園埋没

志賀墓園は、鐵砧山の南麓、約30度の傾斜地にある。当初は丸石をコンクリートで固めた高さ約1メートルの馬蹄状の擁壁で囲まれていた。昭和41（1966）年の生誕百年祭の写真では、北側の擁壁の上部近くまで土砂がたまっており、雑木林の間に大小の石がころがっていて、地滑りが起きれば、擁壁を乗り越えて墓域内に流入するおそれがあったことが見てとれる。

事実、記念碑を建立して数年後、大雨で同所一带に地滑りが発生し、墓園は埋もれてしまった。この状況を知った教え子の李燕山（り えんざん）は、大甲公学校の卒業生に呼びかけて土石を取り除き、墓碑の北側に高さ約5メートル、長さ約20メートルのコンクリートの擁壁を築いて志賀墓園を護ることとした。さらに昭和58（1983）年、擁壁の上に墓所を築き、二重の防護策としたのである。この話は、澤田寛旨氏が平成元年に訪台したとき、李燕山氏から直接聞いた話である。

墓園の埋没は、昭和44年10月、熊本の片岡勝海氏が訪問した以降に発生しており、大甲区の人達は、正確な時期はわからないが、昭和45（1970）年頃と説明した。



17 哲太郎の墓碑を囲む教え子の墓

志賀墓園には、哲太郎の墓碑を囲むように教え子達の墓がある。教え子達の墓について張慶宗氏から「大甲鐵砧山南麓志賀老師與學生墓位置圖」と題したイラストの提供を受けた。これによると、哲太郎を埋葬した愛酒塚の北側に左から宋家、陳家（陳啟明）、李家（銀同）、李家（李燕山）、周家（周棟）、蔡家（蔡寶）の6つの墓園があり、東側に陳家と呉家の2つの墓園がある。さらに呉家墓園から東方の少し離れた場所に黄並傳の墓と許家墓園がある。教え子と確認されているのは、北側の墓所の陳啟明、李燕山、東側の陳家墓園の陳嘉瑜・陳嘉邦兄弟、呉家墓園の呉淮水・呉淮澄兄弟、それに黄並傳と許天奎の8人である。

北側の6つの墓園は、宋家を除いて李燕山、周棟ら5家が1983年に共同して建立したものである。左から2番目の陳家墓園は、明治38年大甲公学校第2回卒業生で大甲帽で大富豪となった陳啟明の墓所。次の李家墓園は銀同で、子孫が台北と神戸にいるが、教え子だったか確認できていない。次の李家墓園は李燕山の墓所。李燕山は昭和2年の卒業生で哲太郎死亡時のことを手記にし、また、志賀墓園が土砂に埋まったとき、後に擁壁を築いた人である。次の周家墓園の周棟と最後の蔡家墓園の蔡寶については、確認は取れていないが、子孫は教え子であった筈と言っている。

東側に隣接して陳嘉瑜と陳嘉邦の墓所がある。墓所には「陳姓公媽佳城」とあり、2011年に改修されている。陳嘉瑜は明治37年の第1回卒業生で哲太郎を支えた教師であり、詩人でもある。陳嘉邦は、哲太郎の民族平等の精神の影響を受けて教師となった後、司法書士をしながら民族運動で活躍した。その隣には呉淮水と呉淮澄の墓所がある。「呉家公墓」と書かれ、墓誌銘に二人の名が刻まれ、1963年に建立されている。呉淮水は、明治43年の卒業生で、哲太郎の葬儀の際に弔辞を読み、また、民族運動のリーダーとして活動した実業家でもあり、生誕百年祭などでは主導的役割を果たした。呉淮澄は、同志社中学に留学し、同じく実業家として活躍した。

黄並傳は、明治37年の第1回卒業生で哲太郎を深く敬慕した教師であり、息子の黄江鎮に「死んだら（志賀）先生の墓のそばに埋めよ」と遺言した。

許家墓園の許家は、大甲の大族で明治38年の第2回卒業生許天奎と関係のある墓所である。許天奎は、哲太郎の勤続13周年の厄払い祝賀会で銀杯を贈り、政治家、実業家として活躍した。





陳啟明の墓所

李燕山の墓所



陳啟明
M38第2回卒



陳啟明の墓所(1983年建立) H29. 11撮影



李燕山の墓所(1983年建立) H29. 11撮影



李燕山 S 2 卒



陳嘉瑜・陳嘉邦兄弟の墓所 (2011年改修) H29. 11撮影



陳嘉瑜
M37第1回卒



陳嘉邦
M38第2回卒



吳淮水・吳淮澄兄弟の墓所 (1963年建立) H28. 2撮影



吳淮水
M43卒



吳淮澄
(淮水の弟)



志賀墓園東側一帯 h29. 4撮影



黃並傳
M37第1回卒



許天奎
M38第2回卒

18 文昌祠入り

平成23（2011）年12月30日、大甲区公所は、大甲の聖人と呼ばれた哲太郎を文昌祠に入れることを発表した。蔡信豊大甲区長は、「志賀先生が、かつて大甲公学校で教師として26年間、1,000人以上の台湾学生を教え、多大な貢献を残された。かつて先生が住んでいた文昌祠西隣の一室を『志賀哲太郎記念室』とし、その遺徳を顕彰するため、肖像、本、動画などを展示する」と説明した。文昌祠は、学問の神様・文昌帝君らを祀る廟であり、日本の天満宮に相当する。多くの参拝客や観光客が訪れる場所である。



大甲区公所 H28.2撮影



文昌祠（大甲区公所提供）



志賀哲太郎記念室入口（文昌祠）H28.2撮影

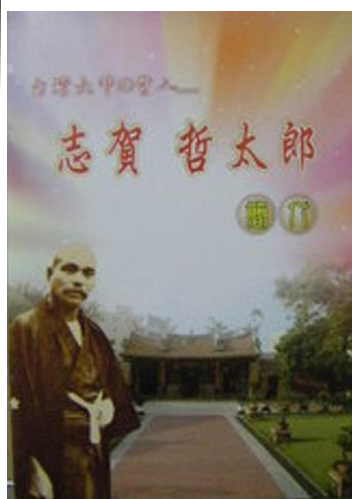
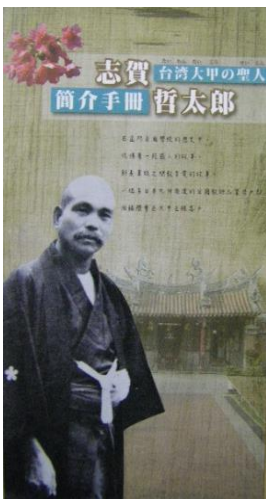
台灣英文新聞 感念日籍教師 遺物進文昌祠

（中央社記者陳靜萍台中30日電）被當地人稱為「大甲的聖人」的日籍教師志賀哲太郎，由於畢生為台中大甲地區教育奉獻心力，死後葬在大甲鐵砧山南麓，為表彰他的情操，大甲區公所決定將遺物安置在文昌祠中。

文昌祠入りの新聞記事



志賀哲太郎記念室内部 H28.2撮影



哲太郎啓発のパンフレットと小冊子（大甲区公所提供）



文昌祠の観光客 H28.2撮影

19 清明節

台湾では、家族全員で祖先を祀る、伝統的な節日として清明節があり、祝日となっている。哲太郎が亡くなってからは、教え子達が清明節に慰霊を続けた。中でも大甲公学校の用務員をしていた李天送は、哲太郎を敬慕した一人で、生涯にわたって墓碑の清掃と慰霊に努めている。

教え子達が亡くなってからは、大甲区公所が清明節の時期に、慰霊を行うようになり、今日に至っている。大甲鎮時代の鎮長郭金焜氏、次の鎮長郭金童氏も哲太郎の教え子である。

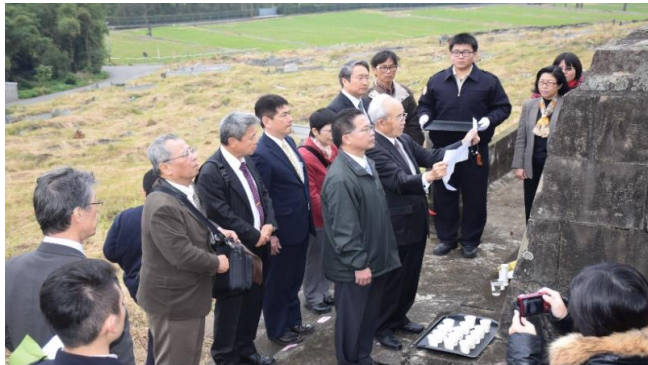
志賀哲太郎顕彰会は、平成28年2月26～29日と平成29年11月16～19日に訪台し、大甲区公所と合同の墓前祭を行っているが、第1回訪台時は、地元新聞の中華日報、台湾好新聞報に大きく取り上げられた。

また、慰霊に関しては、平成元年12月、哲太郎の遺族・澤田寛旨氏が熊本県内の幼・小・中学校の教師19名と大甲訪問を計画、当時の大甲鎮長林英雄氏に申請して実現し、その際、応対してくれた李燕山氏(教え子・当時78歳)が、日本語で哲太郎のことを熱く語り、参加者一同に深い感銘を与えたとのことである。

志賀哲太郎功在大甲 日本顯彰會參訪志賀優良事蹟

記者陳榮昌 / 台中報導

日本志賀哲太郎顯彰會七位熊本縣團員・兩天來在大甲區公所人員陪同・到祭拜志賀哲太郎的墳墓祭拜・並參觀志賀紀念館・團長澤田寬旨表示志賀哲太郎・被稱為「大甲聖人」讓他們感到無比榮耀・並希望與區長劉來旺對兩地的文化、產業及觀光做有效益的交流。



圖說：志賀哲太郎對大甲文化教育有極大貢獻・志賀日本顯彰會在大甲區長劉來旺等人員陪同祭拜「大甲聖人」志賀哲太郎。(記者陳榮昌 / 攝)

本會第1回訪台團と大甲区公所との合同墓前祭
(平成28年2月28日付臺灣好新聞引用)



大甲鎮長
郭金焜M41卒



大甲鎮長
郭金童S 3卒



教え子
李天送M41卒



本會第2回訪台團と大甲区公所との合同墓前祭
平成29年11月17日



蔡信豊区長時代の清明節
(大甲区公所提供)



平成29年3月24日の清明節
(大甲区公所提供)

20 恩師志賀哲太郎

哲太郎が亡くなった大正13年に大甲公学校を卒業した張建墻（ちょう けんしょう）は、昭和53(1978)年にアメリカに移住して、日本語の散文の詩集「赤道と太陽」を発表する。この詩集に「代用教員志賀先生」と「恩師志賀哲太郎頌」があるが、いずれも師を憶う情熱に溢れた詩であり、これらは、14歳のときの作であるという。第2回目の訪台時、張建墻の娘張麗雪氏から大甲区公所を通じて資料の提供を受けた。

代用教員 志致賀先生

本是拿國事當做自己的事來奔走
把輝煌的未來拋得一乾二淨
說是只要代用教員就好了地
起居動作很誠懇地
所以地方的人民就不用懼怕的啦
莫不是正在以身做則來示範

也在大學教過書的先生
來到了台灣的偏僻地方的大甲
就這樣做了小學的先生哇啲做了哇啲
以人對待人的心胸來厚道交往
這位身分低的志賀先生
和新附的人民一塊兒生活的樣本啦嗎

代用教員 志賀先生

もとは国事を我が事として奔走し
輝かしいゆくさきを振り切って
代用教員で良いからと
立居振舞がねんごろで
土地の人がこわがることも無くなった
あるいは身をもって新村の民と共に暮らす

大学でも学んだ先生
台湾の片田舎は大甲のまちへ来て
小学の先生になったわよ、なったわよ
人を人としてあつくつきあったので
この身分低い志賀先生は
お手本をつくっているのでは無いでしょうか

時常很有禮貌的謙恭著
每每覓得空閒就四處去兒童的家庭訪問
語言不通不通的孩子們事不能會意的
不疏忽,不厭倦地教導
成為好好聽話的乖孩子了

對任何人的招呼也鄭重的鞠躬
對著病童則深切的慰問
所以授課要盡其方法使其懂得
終於調皮搗蛋的孩子也熬不過了他
先生是把學生看做自己的孩子一樣教過的人

何時も礼儀正しくへり下って
ひまを見つけては家庭を訪ね廻り
お話の通じない子らは合点せぬから
おろそかにせずうむことなく導き
よく言うことを聞かす子になった

どなたの挨拶にも丁寧なおじき
病気の子には親身なお見舞
授業はさとりまで手をつくして
腕白な子もついには根まけして
先生は生徒を我が子の様に教えた人

勸導入學時雖然說得幾乎要累了
倒是說假如不打孩子
志賀先生就可安心托孫子啦
先生是被家家戶戶信任的人

也是躊躇著要送去唸書或不的老婆婆
親切地給我們教育著
到了這種程度地

入学勧誘にくたびれる位に話しても
子供を打たない
孫が頼めると言う程に

出すか出すまいかとためらう婆さんが
親切に教えてくれる志賀先生なら
先生は家に任せられる人



絵：張建墻作

是不是這個街市好住呢不
 可是哪如果沒有學歷就不會被任官
 因此就隱藏期好好的學歷
 先生是把愛心種植在此地生根的人

雖然台灣的什麼地方都是一樣的
 被任官了就提高了地位被調到他處去
 自願與大家一塊兒生活

此のまちが住みいゝなのか
 學歷が無ければ任官されない
 御立派な學歷をかくして
 先生は愛を植え付けてこの地に根付いた人

いや、台湾の何処でも同じなのに
 任官されたら偉くなって何処へ転勤されると
 何時迄も皆さんと御一緒になりたいと願う

二十六年の長久期間灌注了心血培養的
 雖是各自各地散在四方各處居住
 要探問去說一說的心情是同樣的

少年們如星星一般的繁多
 卻是一樣想著有一天回到故鄉的話
 先生也是可懷的我家庭之一員

二十六年もの長い間心血を注いで培うた
 思い思いに四方の地に散らばっていても
 訪れてまた語らおうと同じ思は一つ

幼児らは星の様に繁く
 古里に帰る日のあらば
 先生もなつかしい我が家の一人

恰如如果要證實給人家看看
 老老小小都悲傷挽行您靈柩的長長送葬行列
 如果想到了被擁抱在鐵砧山麓永眠著
 刻上碑石，口碑言傳地被崇敬著

人是會對誠心報應的老話似的
 誰要輕視清寒的教師呢
 先生的好比王侯的瑩墓
 先生的教化力量之偉大的話。

人は誠にこたえるという言の葉を
 老も若きも悲しんでお柩を送って行く
 誰か身空寒い教師を軽んじましょうか
 王侯にもたぐわれる様なおくつき
 先生の教の大きな力に思を致したら

証して見もせよとばかり
 長い長いお弔いの行列
 鐵砧山のふところに抱かれて永眠する先生の
 碑にきざみ、語りつぎ見い伝えて崇められる

碑 誰 兩 莫 甘 赤 不 滿
 墓 謂 族 莫 沒 心 為 腹
 堂 有 融 非 草 相 顯 經
 皇 德 融 為 萊 待 赫 綸
 永 竟 一 樹 培 無 不 東
 傳 無 家 樹 英 彼 求 瀛
 銘 應 人 模 才 此 財 來

恩師 志賀哲太郎頌



「赤道と太陽」
 (張麗雪氏提供)



画家、詩人
 張建墻 T13卒